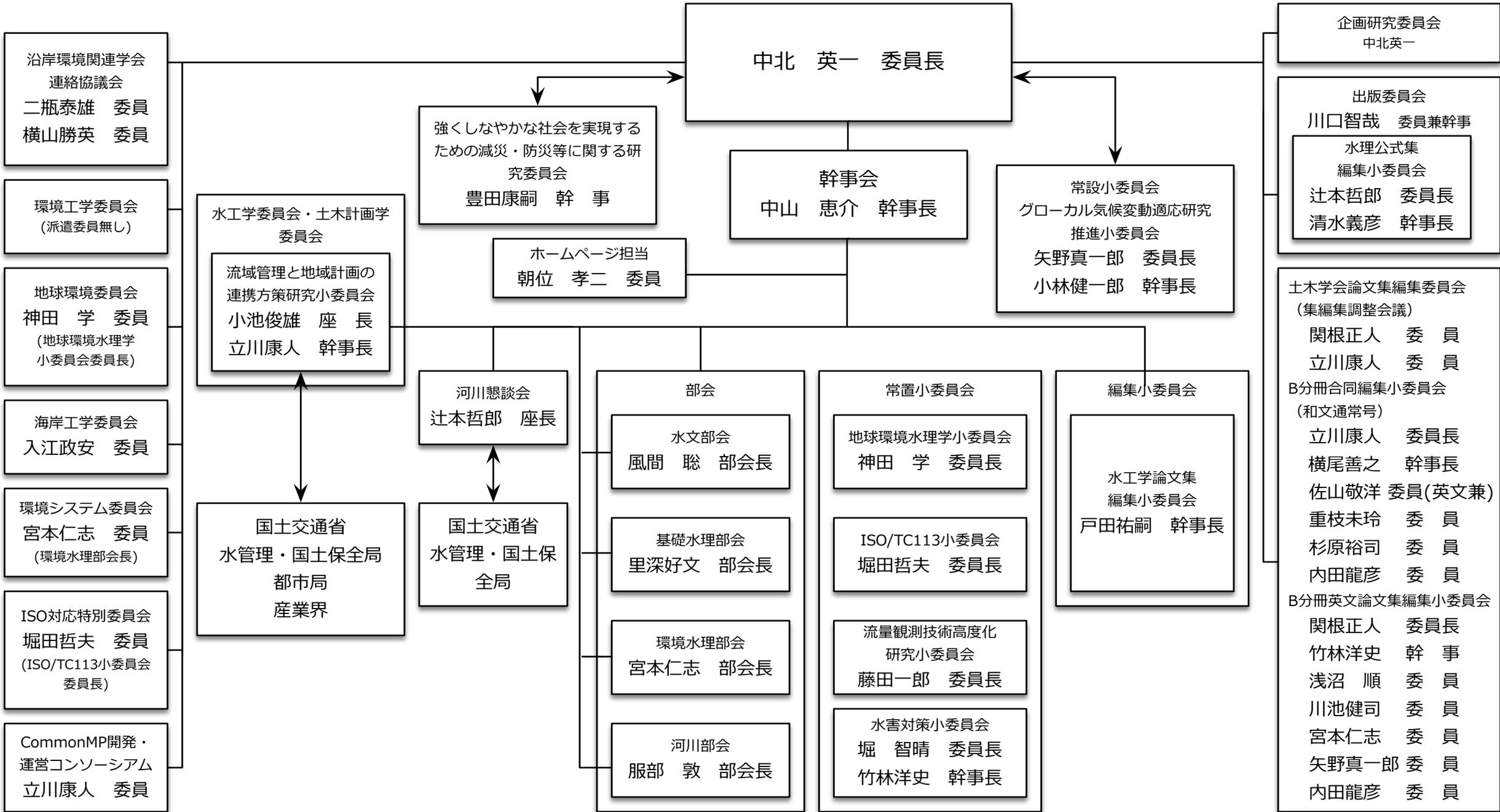


2015-2016 水工学委員会



平成 27、28 年度 水工学委員会構成

【顧問】

- 小松 利光 (九大)
砂田 憲吾 (山梨大学)
辻本 哲郎 (名大)：水理公式集編集小委員会委員長、河川懇談会座長
山田 正 (中央大)：タイ洪水対応小委員会委員長、CommonMP コンソーシアム幹事長、水理公式集編集小委員会アドバイザー
中川 一 (京大防災研) IAHR 日本支部、水理公式集編集小委員会主査
寶 馨 (京大防災研)：水理公式集編集小委員会アドバイザー&主査

【専門委員】 17 名 (定員 17 名) ◎：執行部、○：幹事、△：オブザーバー

- 朝位 孝二 (山口大)：ホームページ担当
中嶋 規行 (日本工営)
泉 典洋 (北大)：水理公式集編集小委員会幹事
大石 哲 (神戸大)
沖 大幹 (東大)：水理公式集編集小委員会主査
河原 能久 (広島大)
岩見 洋一 (土木研究所)
○風間 聡 (東北大)：水文部会長、27 年度水工学講演会担当
清水 康行 (北大)
○立川 康人 (京大)：CommonMP 開発・運営コンソーシアム委員、土木計画学委員会・流域管理と地域計画の連携方策研究小委員会幹事長、土木学会論文集編集委員会 (編集調整会議) 委員、水理公式集編集小委員会幹事
田中 仁 (東北大)：IAHR 理事、27 年度水工学講演会担当
清水 義彦 (群馬大)：水理公式集編集小委員会幹事長
富永 晃宏 (名工大)
◎中北 英一 (京大防災研)：委員長、水理公式集編集小委員会主査
堀智晴 (京大防災研)：水害対策小委員会委員長
◎○中山 恵介 (北見工大)：幹事長
○里深 好文 (立命館大)：基礎水理部会長

【海岸工学委員会との交換委員】 1 名 (定員外)

- △武若 聡 (筑波大)

【地区委員】 32 名 (定員 32 名) (○印：水工学委員会幹事で 20 名以内)

- <北海道 2 名>

- 中津川 誠 (室蘭工大)
- 駒井 克昭 (北見工業大学)

<東北 2名>

- 松富 英夫 (秋田大) : 28年度水工学に関する夏期研修会担当 (案)
- 川越 清樹 (福島大)

<関東 14名>

- 浅沼 順 (筑波大) : 土木学会論文集 B 部門英文論文編集小委員会
- 服部 敦 (国土交通省国土技術政策総合研究所) : 河川部会長
- 今村 正裕 (電中研主任研究員)
- 石平 博 (山梨大)
- 神田 学 (東京工大) : 地球環境水理学小委員会委員長
- 宮本 仁志 (芝工大) : 環境水理部会長、環境システム委員会、土木学会論文集 B 部門英文論文編集小委員会
- 関根 正人 (早稲田大) : 土木学会論文集 B 部門英文論文編集小委員会委員長、水理公式集編集小委員会幹事
- 田中 規夫 (埼玉大)
- 知花 武佳 (東大) : 水理公式集編集小委員会幹事
- 中込 淳 (国交省水管理・国土保全局)
- 天野 光歩 (建設技術研究所)
- 川口 智哉 (日水コン) : 出版委員会委員
- 二瓶 泰雄 (東京理科大) : 沿岸環境関連学会連絡協議会委員、水理公式集編集小委員会主査
- 横山 勝英 (首都大学東京) : 沿岸環境関連学会連絡協議会委員

<中部 3名>

- 原田 守博 (名城大)
- 鈴木 正人 (岐阜工専)
- ◎○戸田 祐嗣 (名古屋大) : 水工学論文集編集小委員会幹事長、水理公式集編集小委員会幹事

<関西 6名>

- 大槻 英樹 (ニュージェック)
- 入江 政安 (大阪大) : 海岸工学委員会対応委員
- 竹原 幸生 (近畿大学)
- 竹林 洋史 (京大防災研) : 水害対策小委員会幹事長、土木学会論文集 B 部門英文論文編集小委員会幹事
- 角 哲也 (京大防災研) : 水理公式集編集小委員会主査
- 藤田 一郎 (神戸大) : 流量観測技術高度化小委員会委員長

<中国 2名>

○近森 秀高 (岡山大)

○矢島 啓 (鳥取大)

<四国 1名>

○石塚 正秀 (香川大)

<西部 2名>

○矢野真一郎 (九州大) : 土木学会論文集 B 部門英文論文編集小委員会、28 年度水工学講演会
担当 (案)

杉原 裕司 (九州大) : 土木学会論文集 B 部門合同編集小委員会

<オブザーバー 1名>

△堀田哲夫 (建設技研) : ISO 対応特別委員会、ISO/C113 小委員会委員長

2016年度（第52回）水工学に関する夏期研修会について

- 開催日：2016年8月22日(月)，23日(火)の2日間
- 会場：秋田大学 一般教育2号館(図青丸) (秋田市手形学園町1-1)
 - ・103講義室(220 m²，210席，1階)
 - ・203講義室(220 m²，210席，2階)
- テーマ：
 - ・河川・水文コース：地球環境変化時代の水防災
 - ・海岸・港湾コース：東日本大震災後の津波防災
- アクセスマップURL：
<http://www.akita-u.ac.jp/honbu/access/index.html>
- その他：
 - ・講師控室兼事務局室を確保
 - ・一般教育1号館(図緑丸)
 - ・208会議室(124 m²，移動席，2階)



6. 河川・水文コース

テーマ：地球環境変化時代の水防災

内容：水災害の防止・軽減(復興を含む)を目指して継続的に様々な取り組みが行われています。国際的な防災戦略である「2005年兵庫行動枠組」後の15年間を対象とした「2015年仙台防災枠組(防災・減災は政策の優先課題, 投資, 強く良い社会の構築, など)」が策定されて1年が経過します。2015年の関東・東北豪雨災害後1年を節目に主な取り組みの方向性を見極め, 水災害の防止・軽減の行方を, 仙台防災枠組や関東・東北豪雨災害を踏まえながら解説します。

○8月22日(月) 9:00~16:30

1. 小池俊雄(東京大学):「仙台防災枠組2015-2030」の策定に向けた科学・技術分野の取り組みとその後の展開
2. 畠山慎一(国交省東北地整):水防災意識社会再構築に向けた取り組みについて
3. 二瓶泰雄(東京理大):2015年関東・東北豪雨災害における鬼怒川の堤防被災状況の把握とそのメカニズムの検討
4. 風間 聡(東北大学):積雪と融雪洪水のモデル化

○8月23日(火) 9:00~16:30

5. 真野 明(東北大学):流出予測, 数時間先から数十年先まで
6. 竹林洋史(京都大学):土砂災害を発生させる現象の実態と解析
7. 泉 典洋(北海道大学):洪水と河道管理
8. 小森大輔(東北大学):防護施設と氾濫

(敬称略)

7. 海岸・港湾コース

テーマ：東日本大震災後の津波防災

内容：2011年の東日本大震災後、津波の防災・減災（復興を含む）を目指して様々な取り組みが行われています。国際的な防災戦略である「2005年兵庫行動枠組」後の15年間を対象とした「2015年仙台防災枠組（防災・減災は政策の優先課題、投資、強く良い社会の構築、など）」が策定されて1年が経過します。大震災後5年を節目に主な取り組みの方向性を見極め、津波の防災・減災の行方を、東日本大震災や仙台防災枠組を踏まえながら解説します。

○8月22日（月）9:00～16:30

1. 今村文彦（東北大学）：国際的な津波防災のあり方 —2015年仙台防災枠組を踏まえて—
2. 諏訪義雄（国総研）：津波防災地域づくりと津波浸水想定の設定
3. 越村俊一（東北大学）：広域災害の把握と評価
4. 影山智将（漁村総研）：津波を踏まえた災害に強い漁業地域づくりについて

○8月23日（火）9:00～16:30

5. 首藤伸夫（東北大学）：高潮・津波対策の歩み
6. 有川太郎（中央大学）：防護施設とまちづくり
7. 田中 仁（東北大学）：津波の河川遡上と防災
8. 松富英夫（秋田大学）：建築物に作用する津波荷重 （敬称略）

8. 告示 土木学会誌7月号, 他

9. 検討課題 テキストのカラー化

水

シンポジウム

錦川

2016 in やまぐち



山口県

やまぐち 水 ISHIN

～明治維新胎動の地、やまぐち発の水文化～

8月25日(木) シンポジウム

 山口県総合保健会館 (山口市吉敷下東三丁目1番1号)

■ プログラム

【午前の部】

9:00 開場

9:30 開会

10:00 特別講演

10:50 基調講演

11:50 昼休憩

【午後の部】

12:50 テーマ別分科会

15:00 休憩

15:10 子どもたちによる発表

15:50 全体会議

各分科会まとめとメッセージ発信

16:50 次回開催県挨拶

17:00 閉会

入場無料

■ 特別講演

「河川の誕生一国土の誕生一」

竹村 公太郎

NPO法人日本水フォーラム代表理事・事務局長

■ 基調講演

「秋吉台カルスト地域に広がる地下水系」

藤川 将之

美祢市立秋吉台科学博物館学芸員

■ 子どもたちによる発表

防府市立小野小学校・小野水辺の楽校空間
利用を考える会

山口市立大殿小学校

■ 第1分科会

「気候変動に対応した防災・減災の在り方」

～ISHINのくから提案～

コーディネーター 風間 聡 水工学委員会水文部会長/東北大学大学院教授

パネリスト 角 哲也 京都大学防災研究所教授

小河 里美 特別養護老人ホーム阿北苑施設長

安光 秀樹 山口放送報道制作局長

田代 誠司 下関地方気象台台長

友澤 晋一 国土交通省山口河川国道事務所副所長

■ 第2分科会

「水の恵みと水辺の魅力」～水辺のISHIN塾～

コーディネーター 朝位 孝二 山口大学大学院教授

パネリスト 関根 雅彦 山口大学大学院教授

浜野 龍夫 徳島大学大学院教授

白井 啓二 錦川流域ネット交流会代表世話人

水摩 嘉孝 山口市観光ボランティアガイドの会

石田 明 山口県土木建築部河川課課長

8月26日(金) 現地見学会

「水の恵みと歴史探訪」～明治維新へタイムトラベル～

■ 日程

8:45 集合 湯田温泉

一の坂川、瑠璃光寺五重塔、

阿武川ダム、松陰神社、

萩城下町散策、秋芳洞

17:00 解散 新山口駅経由、湯田温泉

参加費2,000円

(昼食込み、小学生以下半額)

定員 40名(先着順)

申し込みについて

シンポジウム、現地見学会ともに事前申し込みが必要です。

詳細は、チラシの裏面、もしくはホームページでご確認ください。

締切8月12日(金) 必着



一の坂川

お土産の写真
募集!

同時開催

やまぐち水辺の写真館 フォトコンテスト

締切7月20日(水) 必着

応募方法等、詳しくは、水シンポジウムホームページよりご確認ください。

主催 / 第21回 水シンポジウム 2016 in やまぐち実行委員会

((公社)土木学会水工学委員会・国土交通省中国地方整備局・山口県・山口市)

共催 / (一財)防災研究協会、(一社)中国建設弘済会、(一社)日本建設業連合会中国支部、

(一社)建設コンサルタンツ協会中国支部、(一財)日本建設情報総合センター中国地方センター

(一財)山口県建設技術センター、(一社)山口県建設業協会、

(一社)山口県測量設計業協会、中国地質調査業協会山口県支部

後援 / KRY山口放送、山口新聞社

このシンポジウムは、河川財団による河川基金の助成及び防災研究協会による助成を受けています。



河川
基金

- 土木学会CPDプログラム
- CPDS認定プログラム
- 全測連設計CPD認定プログラム

第21回 水シンポジウム 2016inやまぐち

やまぐち水 ISHIN ~明治維新胎動の地、やまぐち発の水文化~

山口県は、本州の最西端に位置し、三方を瀬戸内海、響灘、日本海に開き、山陽、山陰という二つの顔を持っており、海に山に多彩で美しい自然に恵まれている。中でも、秋吉台の地下水系は、秋芳洞などの多くの洞窟を形成し、貴重な生物の生息場所となっており、ラムサール条約湿地に登録されている。

また、その地理的な特性から、古くから大陸との門戸や、本州と九州を結ぶ拠点として栄え、「西の京山口」を築いた大内氏、明治維新を成し遂げた長州

藩など常に新しい時代を切り開いてきた。

川づくりにおいても、山口市の一の坂川では、全国に先駆けてホテル護岸が整備され、地域住民によるゲンジボタルの飼育・放流活動が積極的に行われるなど、環境保全活動や川を活かしたまちづくりが行われている。

一方で、山口県においては、平成 25 年 7 月の山口・島根豪雨など、近年、気候変動に起因すると考えられる記録的な集中豪雨による災害が多く発生してい

る。こうした災害は今後、益々、頻発・激甚化することが懸念されており、大規模氾濫に備えた「水防災意識社会」の再構築など、新たなステージに対応した防災・減災対策の取り組みが喫緊の課題である。

このような山口県における自然、歴史、災害の経験を踏まえ、治水、水資源の保全、水辺空間の魅力の再発見等について議論し、未来への提案を「やまぐち水 ISHIN」として全国に発信する。

このシンポジウムは、市民、学会、行政、民間が一同に会して水に関する諸問題をとともに議論し、相互理解と情報共有を図ることを目的に開催します。

参加申込方法 締切 8月12日(金) 必着

【ホームページによるお申し込み】

下記 QR コードより、入力フォームにご入力の上、お申し込みください。

【FAX によるお申し込み】

下記の申込書、もしくは、ホームページ内の申込書をダウンロードの上、必要事項を記入してご送付ください。

【Eメール・フリーダイヤルによるお申し込み】

下記項目をご入力、お申し付けください。

- ① 参加人数、住所、氏名（ふりがな）
- ② 年齢、性別
※参加される方全員分のご記入をお願いします。
- ③ 電話番号、メールアドレス
- ④ 参加を希望される企画（複数選択可）
・8月25日シンポジウム
・8月26日現地見学会（先着40名）
・両日参加
- ⑤ 弁当申し込み
- ⑥ CPD申し込み

8月25日のシンポジウムでは、会場周辺の飲食店が少ない為、お弁当の注文を承っています。ご利用の方はご記入をお願いします。

現地見学会につきましては、万が一に供え、レクリエーション保険等に加入させていただきますので、※は必ずご記入をお願いします。また、参加費は当日現地受付にてお支払いください。

CPDを申し込まれる方は、当日、免許証等本人確認のできる身分証明書をお持ちください。

※ご記入いただいた個人情報は、お申し込みのイベントに関連した連絡のみ使用いたします。



第21回水シンポジウム 2016 in やまぐち

*****シンポジウム会場*****

山口県総合保健会館
(山口市吉敷下東三丁目1番1号)

交通アクセス

JR湯田温泉駅からタクシーで約7分
中国自動車道小郡ICから車で約20分

駐車場案内

隣接駐車場収容台数300台。
駐車場には収容台数に制限がございます。
ご来場の際は、公共の交通機関をご利用下さい。



*****第21回水シンポジウム2016inやまぐち*****

FAX専用 お申込書 締切 8月12日(金)

シンポジウム・現地見学会へのお申し込みは
FAX番号 083-933-3789までご送付ください。

※は必ずご記入ください。

※参加希望企画	<input type="checkbox"/> 8月25日シンポジウム <input type="checkbox"/> 8月26日現地見学会(¥2,000円、小学生以下半額) <input type="checkbox"/> 両日参加 <input type="checkbox"/> 8月25日シンポジウム弁当注文(¥600円お茶付)		
フリガナ		※年齢	
※氏名		※性別	男・女
※住所	〒		
※電話番号	() - () - ()	※FAX番号	() - ()
※メールアドレス			
CPD	<input type="checkbox"/> CPD <input type="checkbox"/> 全測連設計 CPD 所属団体		

シンポジウムにお申し込みの方は、この参加申し込みをもちまして受付完了とさせていただきます。現地見学会にお申し込みの方は、受付結果を後日FAXにて連絡させていただきます。

●中止、延期の場合は8月23日(火)に上記のホームページで発表します。



*****開催内容お問合せ*****

第21回水シンポジウム 2016in やまぐち 実行委員会

山口県土木建築部河川課(事務局)
〒753-8501 山口県山口市滝町1番1号
TEL 083-933-3770

*****参加申込お問合せ*****

第21回水シンポジウム 2016 in やまぐち

☎ 0120-825-026
(受付時間 平日 9:00 ~ 17:00)

FAX 083-933-3789

http://www.mizusinpo2016.com

Email/info@mizusinpo2016.com

平成 28 年度全国大会開催に伴う研究討論会企画

1) 委員会名：水工学委員会

連絡者氏名：中山恵介

連絡先住所：〒657-8501

兵庫県神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 1W-209

電話番号：078-803-6056

E-mail アドレス：nakayama@phoenix.kobe-u.ac.jp

2) 研究討論会のタイトル

気候変動への適応研究推進に向けて！

3) 座長氏名：中北英一

所属：京都大学防災研究所

4) 話題提供者氏名・所属：

有働恵子・東北大学

風間聡・東北大学

神田学・東京工業大学

宮本仁志・芝浦工業大学

森信人・京都大学

矢野真一郎・九州大学

藤田光一・国土技術政策総合研究所

5) 定員：200 名

主題（300 字以内）

地球温暖化時の降水・洪水への適応策の提案だけでなく、水循環や水環境を含めた気候変動の影響評価、適応策の提案が求められている。しかし、影響評価研究に比較して、適応策の提案研究が十分に進み活用されているとは言いがたい。そのため、気候変動の様々な分野への影響が明らかとなっていることを踏まえ、適応に向けたより一層の研究推進および成果の発信が必要であると考え。本討論会においては、トップダウンとしての基本計画的な位置づけでの実務機関と気候研究コミュニティの連携を保ち、かつボトムアップとして、水工学として適応のために議論・研究しておくべき「外力や環境の変化に伴う技術、計画論とは何なのか？」を、水工学の観点から議論するものである。

（備考）

話題提供者の都合で、本企画を学会初日（9月7日）としていただきますとありがたく存じます。よろしくお願ひ申し上げます。

全国大会 研究討論会 企画（水工学委員会）

- 1) 委員会名：水工学委員会
連絡者氏名：立川康人
連絡先：京都大学大学院 工学研究科 社会基盤工学専攻
〒615-8540 京都市西京区京都大学桂 C1
Tel: 075-383-3362
Email: tachikawa@hywr.kuciv.kyoto-u.ac.jp
- 2) 研究討論会のタイトル：
水工情報システムの発展
- 3) 座長氏名：山田 正（中央大学理工学部土木工学科）
- 4) 話題提供者名：
立川 康人（京都大学）、
大平 一典（中央大学）、
菊森 佳幹（国土技術政策総合研究所）他
- 5) 定員：約 200 名

主題：

激甚化している水災害に備えるため、降水現象や洪水流下等の水文・水理現象を確実に捉え、水工情報として防災・減災の活動に使えるよう高度化・システム化することが求められている。このことから、水文・水理現象を観測する技術とシミュレーションする解析技術（データ補完・データ同化等）、観測・解析した結果を可視化する技術などを高度に組み合わせ、有効に活用することの重要性が増している。しかしながら、個々の技術は独自の研究開発分野ごとに発展してきた経緯があり、互いに連携する機会が少なかった。そこで本研究討論会では、これらの個々の観測技術、解析技術、可視化技術等の水工情報システム全体を形づくる各分野の研究開発者が連携し、互いに発展するための方策について議論する。

（備考）

今年度から第 2 部門の一般セッションに「水工情報システム」を新設しました。この一般セッションと今回、提案します上記討論会は密接に関連します。そこで、もし、この討論会が採択されましたら、可能であれば、この一般セッションと同日にさせていただきたく存じます。よろしくお願いいたします。

平成28年度全国大会研究討論会時間割(案)

9月7日(水)_13:00-15:00					9月9日(金)_13:00-15:00						
No.	委員会	題目	部門	人数	予定会場	No.	委員会	題目	部門	人数	予定会場
1	地盤工学委員会・堤防小委員会	河川堤防の安全性を如何に守るかー今後数百年を見据えてー		100	B棟B101	14	環境工学委員会	「東日本大震災から5年を経た復興状況から今後の下水道の在り方を考える」		50	B棟B204
2	原子力土木委員会	断層変位に対する原子力関連施設の安全性評価		100	B棟B102	15	土木情報学委員会	「(仮)災害時における情報技術の果たすべき役割」		100	B棟B101
3	環境システム委員会	災害廃棄物の発生量予測・処理・復興資材活用のシステム計画		50	A棟A307	16	エネルギー委員会	放射性汚染廃棄物対策技術ー除去土壌の減容・再生利用方策等についてー		80	B棟B203
4	木材工学委員会(構造工学委員会との合同開催を打診中)	「防災・減災・復旧への構造的アプローチと木材利用の可能性」(仮題)		100	B棟B103	17	安全問題研究委員会	地域社会の安全を目指したレジリエンスエンジニアリング		50	A棟A307
5	減災アセスメント小委員会(海岸工学委員会と土木計画学研究)	津波減災のための事前対策政策とその社会実装可能性の検討		50	A棟A401	18	舗装工学委員会	ビックデータ時代と道路(仮称)		100-150	B棟B102
6	水工学委員会	気候変動への適応研究推進に向けて!		200	C棟C200	19	水工学委員会	水工情報システムの発展		200	A棟A200
7	鋼構造委員会	鋼橋の長寿命化に向けてー防食技術の進むべき方向ー		200	B棟B200	20	海岸工学委員会	『実験における地盤材料の評価ー水理学的アプローチと地盤工学的アプローチー』		40	A棟A401
8	土木学会コンサルタント委員会市民合意形成小委員会	人口減少下における市民合意形成		50	B棟B202	21	複合構造委員会	困った時の複合構造物ー施工性の改善と今後の課題ー		130	B棟B103
9	応用力学委員会	測る×コンピューティング		70	B棟B203	22	建設マネジメント委員会	今後の公共工事発注方式のあり方を考える		50-100	B棟B104
10	建設用ロボット委員会	建設生産性向上に向けた施策・動向に対する建設用ロボット委員会の対応ー建設用ロボット委員会の新たな取組み		100	B棟B104	23	構造工学委員会	(案)土木構造物共通示方書の位置づけー学会示方書のあり方ー		150	B棟B201
11	コンクリート委員会	生産性および品質向上のためのコンクリート工学を目指して		なるべく大きく	A棟A200	24	アセットマネジメントシステム実装のための実践研究委員会	インフラ維持管理・更新におけるイノベーションの創造と地方インフラのマネジメント		200	C棟C200
12	土木広報センター	「市民のイメージネーションに働きかける土木広報」		100	B棟B201	25	土木技術映像委員会	「土木学会東日本大震災アーカイブサイトの今後の展開(その3)ー震災映像が語る現場からのメッセージー」		100	B棟B202
13	企画委員会「若手会員パワーアップ小委員会」	「Innovationー若手技術者による土木“革新”ー」		50	B棟B204	26 次期会長枠				200	B棟B200

●開催希望アリ

防災
その他
環境技術
社会インフラ維持管理
国際

水文部会報告

- 第三回水文部会
 - 9月??日(?) 東北大学川内キャンパス
全国大会期間中
- 水文部会研究集会
 - 10月14日～15日
 - 秋田, 見学: 雄物川流域, 物部長穂記念館, 強首輪中他
- 水シンポジウム
 - 8月25日～26日
 - 山口市 水文部会が企画
- 我が国のレーダ雨量計研究開発50年の歩み
 - 10月18日13:30-17:30 東京大学 武田先端知ビル5F 武田ホール
- 新しいメーリングリスト

cvlhydro@group.kobe-u.ac.jp

2016.7.11 水工学委員会

基礎水理部会の活動報告と活動計画

■河川砂防技術基準をベースとした意見交換会

- ・日時：平成 28 年 3 月 15 日 15:00-17:00 (終了)
- ・場所：東北工業大学八木山キャンパス 932 号室
- ・備考：次回は 11 月頃予定

■iRIC 講習会

- ・日時：平成 28 年 6 月 15 日 (水) ～6 月 17 日 (金) (終了)
- ・場所：富山県民会館

■第 1 回基礎水理部会

- ・日時：平成 28 年 9 月 8 日 (木) 12:00-13:00
- ・場所：仙台国際センター (予定)

■基礎水理部会見学会

- ・日時：平成 28 年 10 月 16 日 (日) ～10 月 18 日 (火) (予定)
- ・場所：斐伊川, 宍道湖, 旭川 (予定)

■基礎水理シンポジウム 2016

- ・日時：平成 28 年 12 月 5 日 (月)
- ・場所：土木学会講堂
- ・講演テーマ：浮遊砂, SS, ウォッシュロードの関連で検討中

1. iRIC 講習会 in 富山 開催

6月15日～17日、富山県民会館、受講者41人

2. CommonMP との連携について

6月21日、国総研・ICHARM・iRIC 研究会の三者で CommonMP と iRIC の連携について協議

3. iRIC 講習会 in Tucson 開催について

平成28年4月5日～7日、アメリカの Tucson で iRIC 講習会、日本から講師3名参加

4. iRIC 講習会 in Florida 開催について

平成28年5月22日、アメリカの Florida で iRIC 講習会、日本から講師3名参加

5. 今後の予定

- ・ IAHR APD 2016 (8/28-8/31@スリランカ) においてブース展示を行う。また学会前後で iRIC 講習会を2回開催する予定。
- ・ 台湾・台中講習会 (Feng Chia University、Shaohua Marko Hsu 教授) 2016年10月末～11月初旬の中の3日間
- ・ タイの国内の水理関係の学会 (1/25-1/27@タイ) に関連して iRIC 講習会を開催

以上

環境水理部会活動報告

部会長 宮本(芝浦工業大学)

研究集会(5/19-20)@香川(石塚) 開催報告

WG:閉鎖性水域研究WG(矢島):湖沼生態系モデル

樹林化WG(赤松):とりまとめシンポ(11 or 12月).

動的総合土砂管理に関するWG(竹林):見学会(10月)

温暖化適応WG(矢野):第2回(5/21)・3回(8/19)ワーキング

環境水理教科書英文化WG(矢野):<新規WG>

H28研究集会in香川

幹事 石塚(香川大学)

- 日時: 2016年5月19-20日
- 場所: 高松市生涯学習センターまなびCAN 大研修室
- 行程: 参加人数(82名、内学生26名)
- 行程:
 - 19日(木)
 - 発表会(16件)
 - 特別講義(多田邦尚先生)
 - 交流会・ナイトセッション(59名)
 - 20日(金)
 - 発表会(15件)
 - 見学会(49名)「満濃池, 香川用水記念館, 土器川巨石実験」
- 詳細・概要集: http://www.jsce.or.jp/committee/hydraulic/kankyousuiri/_workshop/h28/2016_before.html



宮本部会長挨拶



研究発表会



ナイトセッション



見学会(うどん)



見学会(満濃池)

閉鎖性水域WG

ワーキンググループ名：閉鎖性水域WG

幹事：鳥取大学 矢島

ミッション：国内全体の閉鎖性水域に関する研究分野の活性化とレベルアップを図るとともに、国際的にも通用する湖沼生態系モデルの開発を行う。

メンバー：現在関連研究を行っている方だけでなく、これから閉鎖性水域の研究を行いたい人にも入っていただく(現時点での参加者は、部会メンバー7名+部会外メンバー11名の合計18名)。

今年度活動予定：

(1) ダム・湖沼生態系モデルFantom3D-AEDのテストユーザの募集予定
宍道湖を対象に植物プランクトンを含む生態系モデルの検証終了

(2) 研究集会の開催予定

(3) 「ダム貯水池の水環境に関する現状と将来」に関するシンポジウム開催
応用生態工学会とのジョイントで10月14日(金)、広島市内で開催予定

温暖化適応の環境水理学的視点からの探求WG

[適応WG]の活動報告: WG主査 矢野真一郎(九州大学)

【メンバー:新規追加あり】

宮本(芝工大)・矢島(鳥取大)・田代(名大)・赤松(山口大)・梅田(東北大)・工藤(いであ)・櫻井(土研)・鈴木(八千代)・鶴田(土研)・中山(神戸大)・矢野(九大)・湯浅(パソコン)・井芹(西技)・石塚(香川大); [部会外メンバー]朝位(山口大)・上原(パソコン)・對馬(土研)(計17名)

【第2回WG】

2016年5月21日(土) 9:00~12:20

高松市生涯学習センターまなびCAN

参加者:18名

- ・プロジェクト研究の推進について協議.
- ・中山先生, 井芹様, 梅田先生, 櫻井様に適応関連の先行研究を紹介いただいた.

【今後の予定】

7月下旬~8月中に第3回WGを開催. 研究プロジェクトについて具体的に協議する.

年2~3回実施予定.

水工学委員会に設置された適応小委員会や他部会との協働を図る.



2016/07/11

H28 第 1 回水工学委員会資料 河川部会

河川部会の活動報告および活動計画

◆河川技術に関するシンポジウム

6/2(木), 3(金)に第 22 回を開催：東京大学弥生講堂にて。参加人数 485 名。

- ・ 今回の新たな取り組み
 論文集の電子化出版：白黒印刷冊子に CD を添付して出版
 ポスターセッション：従来 3 セッションを 4 に増
 (参加者数増加→見にくい・狭いという意見への対処)
- ・ 次回第 22 回を H28/6/16(木), 17(金)同講堂で開催予定

◆今年度の活動予定

- ・ 活動 1) 論文募集・査読・論文集の発刊・シンポジウムの運営
- ・ 活動 2) オーガナイズドセッションの企画・運営
 特定テーマ 2 件, ポスターセッション関連テーマ 2 件
- ・ 活動 3) ワーキンググループ活動
 観測技術・解析技術 WG、河川管理のための気候変動適応 WG、堤防 WG
- ・ 活動 4) 「河川技術論文賞」：第 1 回目の受賞者選定
 査読・候補者選定を 10 月目処で実施→第 23 回で受賞者発表予定
- ・ 活動 5) 河川砂防技術基準に関する意見交換会
- ・ 部会会議：年間 3 回を予定 (10 月, 2 月, 4 月), その他メールで意見交換

◆報告

- ・ 部会委員の 1 増：(一財)河川情報センターより部長クラス
 →今回シンポ OS および WG「観測技術・解析技術」の官関係者の拡充
 これにより、部会委員は学 11 名、民 10 名、官 11 名の全 32 名
- ・ 運営体制の強化：副部会長 2 名→最大 3 名までとできる(会則改定する)
 →例年の運営に加え、論文掲載数の増(投稿数増を受けて)、論文賞の
 選考などの仕事量増への対応策として(+部会長が例年のように時間
 を割けるか不透明であることへのセイフティ・ネットとして)
- ※副部会長の担当を下記のとおり明確化・部会長と連携して運営効率化
 - 1：論文編集担当(査読システム, 論文集編集, 論文賞の選定)
 - 2：企画・研究担当(WG・OSの活性化, 河砂基準の勉強会など)
 - 3：総務担当(部会, シンポジウムの運営改善)

以上

水害対策小委員会活動報告

2016年3月以降の活動

2016年3月：2015年度第二回水害対策小委員会開催
河川災害シンポジウムの実施（参加人数：250名） **過去最高**
参考：2014年（早稲田大学） 241名
2013年（神戸大学） 163名
当日配付資料に対して、自然災害研究協議会から15万円の補助。



- 2016年4月：2015年関東・東北豪雨合同調査団東北グループ最終報告書作成
- 2016年5月：2015年関東・東北豪雨合同調査団関東グループ最終報告書作成
- 2016年5月10日：2016年土木学会水工学委員会熊本地震災害調査団の結成
- 2016年5月20日：2015年関東・東北豪雨合同調査団関東グループ最終報告会開催（参加人数：140名）
- 2016年6月24日：2016年度第1回水害対策小委員会
熊本地震災害調査団の活動報告
災害写真データベースシステムの構築
災害調査時の保険契約の継続など

2016年度の活動予定

- 2016年7月以降：国内・海外の水害調査サポート
- 2016年3月：河川災害に関するシンポジウム（九州大学）
- ・調査方法の統一化WG
 - ・消防連携WG
 - ・災害写真データベースシステムの構築

熊本地震災害調査団：

【設立趣旨】

平成28年4月に熊本を震源として2度にわたり発生した震度7の直下型地震は、震源の熊本市を中心に甚大な人的・物的被害をもたらした。その中で、河川に関する被害も多大なものが見られた。例えば、一級河川の緑川水系や白川水系、並びに多くの二級河川(例えば、秋津川・木山川など)では、堤防の損壊が発生し(国直轄:171箇所、県などの管理区間:520箇所)、水害リスクの上昇が危惧された。また、白川上流域では阿蘇山周辺で大規模な斜面崩壊が発生し、大量の土砂(推定100万m³)が河川へ流出した。出水期にこれらの土砂が下流に到達し堆積することで氾濫リスクが高まることが予測されている。さらに、斜面崩壊に伴い森林から多量の倒木が発生し、そのまま斜面上に放置されているケースが見られるため、大規模な豪雨が発生した場合は、大規模な斜面崩壊に伴う流木の大量発生が危惧されている。また、水力発電施設の損壊による大量の流出水の発生、ならびに白川河口域へ上流から流出して堆積した火山灰土により干潟域生態系への悪影響の発生なども起こった。このように、建物や橋梁・道路・鉄道などのインフラ被害に加えて、多くの河川関連の被害が発生した。

平成28年6月現在では、大規模な豪雨の発生が見られていないことから、これら今回の地震に伴う河川被害に起因する水害は起きていないが、震度7クラスの直下型地震がもたらす河川の安全性などへの影響については、詳細に調査することで、今後予想されている首都直下地震などにおける河川災害リスクの低減へ活かせることが期待される。そこで、今回の地震に伴う河川などへの影響を包括的に調査し、今後の施策に反映させるための基礎データとなる報告を行うことを目的とした調査団を結成した。

【メンバー: H28年6月現在】

団長: 大本照憲(熊本大学)

幹事: 矢野真一郎(九州大学)

団員: 二瓶泰雄(東京理科大学), 竹林洋史(京都大学), 赤松良久(山口大学),
田井明(九州大学), 木村延明(九州大学), 平川隆一(前橋工科大学),
田代喬(名古屋大学), 石藏良平(九州大学: 地盤工学)

特別団員(非会員): 小森田智大(熊本県立大学)

【調査内容】

1. 河川全体の治水安全度低下について: 今回の地震に伴う, 白川・緑川・二級河川の河川安全度への影響を河川全体の総合的調査結果から評価し, ハード・ソフトの両面から大規模地震発生後の対応方針立案における課題抽出を行う.
2. 河川堤防の安全性低下について: 地震により発生した堤防基礎地盤の液状化や堤体の変状などの発生メカニズムを地盤力学的解析により検討する.
3. 上流域斜面崩壊に起因する土砂流出がもたらす河川安全度の低下について: 白川上流域の流出土量から土砂流出解析を, またドローンを利用した河川地形測量を実施し, 洪水リスクへの影響を調査する.
4. 上流森林域の崩壊に起因する流木災害リスクについて: 河道や斜面上に残存する倒木量の調査, 大規模出水が発生した際の流木災害リスク評価を白川流域で行う.
5. 地震による水力発電所被災メカニズムについて: 黒川第一水力発電所を中心に, 被災状況の調査を行い, 地震に対する水力発電施設の脆弱性について評価する.
6. 河口干潟の土砂堆積に伴う地形変形と生態系への影響: 白川の河口干潟を中心に深淺測量を行い, 河口干潟域の地形変形と地震に起因する堆積物による干潟生態系(主に, アサリなどの二枚貝)への影響評価を行う.

グローバル気候変動適応研究推進小委員会の活動報告:

【メンバー: H28年6月現在】

委員長: 矢野 真一郎(九州大学), 幹事長: 小林健一郎(神戸大学)

委員:

水工学: 赤松良久(山口大学)・音田慎一郎(京都大学)・里深好文(立命館大学)・佐山敬洋(京都大学)・多田毅(防衛大学校)・田中智大(京都大学)・田村浩敏(建設技術研究所)・椿涼太(名古屋大学)・戸田祐嗣(名古屋大学)・中北英一(京都大学)・中津川誠(室蘭工業大学)・中山恵介(神戸大学)・丸谷靖幸(京都大学)・宮本仁志(芝浦工業大学)・矢島啓(鳥取大学)

海岸工学: 森信人(京都大学)・山城賢(九州大学)

地盤工学: 石蔵良平(九州大学)・笠間清伸(九州大学)

※計画系委員を2名追加予定

【第1回小委員会】

➤ 2016年7月に開催予定. 小委員会の活動方針について議論する予定.

【今後の予定】

- 水工学を核とした適応策のあり方や研究推進に向けた方向性を議論.
- 次年度の土木学会重点研究課題への応募, 年次講演会での討論会などシンポジウムなどの開催, 科研や大型プロジェクトの企画, などを計画する予定.

土木学会英文論文集

- 2016年春に推薦論文の執筆を依頼した.
- 提出期限が記載されているが, 目安として考えて欲しい.
- 基本的には無期限に受付を行う方針である.

ご投稿, よろしくお願い申し上げます.

平成28年度第1回海岸工学委員会報告

6月15日14:00～17:15土木学会2階講堂

■ 委員交代・議事録確認

■ 議事前報告

全国大会9/9（金）研究討論会（地盤～波連携の企画）提案済み

H28学会重点研究課題助成（減災アセスメント小委員会提案）

H27活動評価結果（前年BからAランク）

■ 第63回（本年度）海岸工学講演会準備状況

日程：11月16（水）-18（金）

場所：大阪大学中之島センター
（大阪市北区）

企画セッション「東日本大震災と環境」

前日シンポ 津波小委員会が担当

■ 第64回（次年度）海岸工学講演会の開催について

日程：2017年10月25（水）-27（金）

場所：TKP札幌駅カンファレンスセンター

■ 第53回（次年度）水工学に関する夏期研修会

大阪で開催（大阪大学荒木委員）

■ 研究小委員会等の活動について

広報小委員会，沿岸域小委員会，津波小委員会，波動モデル小委員会，減災アセスメント小委員会の既存小委員会に加えて，

- ・地域研究活性化（地域問題研究）小委員会（仮）

- ・水理模型実験における地盤材料の取り扱い方法に関する研究小委員会（仮）

の活動開始

■ その他

Coastal Engineering Journal

海岸工学講演会論文審査

平成 28 年 5 月 19 日

水工学委員会
委員長 中北 英一 様

公益社団法人 土木学会
調査研究部門
主査理事 久保田 尚

平成 27 年度 調査研究委員会の活動度評価の結果
および平成 28 年度調査研究費予算配分について（ご報告）

土木学会調査研究部門会議は、調査研究部門に所属する委員会の平成 27 年度における活動度について、厳正に評価いたしました。

その結果、貴委員会の活動度の評価結果は下記のとおりとなりましたので、ご報告いたします。

なお、ご参考までに平成 22 年度～26 年度の総合評価を併記いたしますとともに、「平成 27 年度実績の委員会情報発信数」を添付いたします。（平成 23 年度実績による活動度評価は評価方法の移行期のため実施しておりません）

記

1. 平成 27 年度実績の委員会活動度評価結果および平成 28 年度予算配分額

年度	情報発信数			活動度評価 ランク	平成 28 年度配 分額
	①行事参加者数	②出版物購読者数	合計（①+②）		
平成 27 年度	3870 人	1569 人	5439 人	A	980 千円

- ・ 上記配分額には、調査研究拡充支援金（旧 行事還元金）を含みません。
- ・ 活動度評価（平成 22 年度までは総合評価）が C ランクとなった委員会および評価結果に異議のある委員会については、調査研究部門会議、研究企画委員会合同会議が活動内容と今後の取組みについてヒアリングを実施します。
- ・ 活動度改善に向けて、調査研究部門としても適宜個別にアドバイスさせていただきますので、何かございましたら問合せ窓口までお知らせください。また、評価結果に異議のある委員会についても問合せ窓口までご連絡ください。
- ・ **※ 公益増進資金 30 万円を含んだ金額になります。**

2. [参考] 活動度評価ランクと予算配分の関係

活動度評価 ランク	情報発信数	予算配分
A	2,500人以上	予算総額に応じて55万円+情報発信数に応じた金額。 ただしAランクの情報発信数は2,500人として計算※。
B	500人以上 2,500人未満	
C	500人未満	一律55万円

※A, Bランクの委員会の予算配分方法

$$\begin{aligned} \text{予算配分額} &= 55 \text{万円} + \text{情報発信数 (500人超分) に比例した金額} \\ &= 55 \text{万円} + (S - 55 \text{万円} \times n) \times a / b \end{aligned}$$

ここに、S：当該年度の調査研究委員会の総予算額（平成28年度調査研究部門予算から新規制度等調査研究費（重点研究課題）ならびに研究企画委員会予算を除いた2,245万円）

a：当該委員会の情報発信数（Aランクは2,500人とする）－500人

b：全委員会のaの合計（平成27年度：30,245人）

n：委員会数（現在29、研究企画委員会は含まず）

3. [参考] 平成22年度～26年度の貴委員会の総合評価

年度	総合評価
平成22年度	A
平成24年度	A
平成25年度	A
平成26年度	A

4. [参考] 調査研究委員会の継続・新設 評価要領【抜粋】

(3) 評価時期

委員会の新設要望があった場合 および 既存委員会活動の活動度評価が3年間連続してCランクとなった場合に、当該委員会の継続・新設・廃止を検討する。

問合せ窓口：事務局 研究事業課長 工藤 (kudo@jsce.or.jp)

以上

使命(例:1.), 具備すべき機能(例:a))

1. 学術・技術の進歩への貢献

- a)学術・技術の先端性・統合化
- b)学術・技術の事業への展開
- c)技術蓄積・移転・流通(技術基準の国際化)

2. 国内・国際社会に対する責任・活動

- d)公正な立場からの専門的知見の提供・技術支援等の社会貢献
- e)国際調和と貢献
- f)情報収集・分析・発信機能

3. 技術者資質と会員満足度の向上

- g)技術者支援(技術力の向上、倫理観の研鑽等)
- h)情報取得機会の拡大
- i)学会運営の適正化・効率化

○：水工学委員会が対象となる項目

具備すべき機能(例:a), 基本目標(例:a1))

a)学術・技術の先端性・統合化

○a1)学術・技術の革新・蓄積・継承

○a2)社会の構造変化に対応した学術領域の再構築

○a3)災害対応技術の確立

○a4)都市再生に資する技術の確立

○a5)地球規模的課題に対処する技術の確立

b)学術・技術の事業への展開

○b1)横断的・総合的調査・研究開発の体制確立

c)技術蓄積・移転・流通(技術基準の国際化)

c1)「土木総合情報プラットフォーム」の構築

d)公正な立場からの専門的知見の提供・技術支援等の社会貢献

○d1)良質な社会基盤整備への貢献

e)国際調和と貢献

f)情報収集・分析・発信機能

g)技術者支援(技術力の向上、倫理観の研鑽等)

h)情報取得機会の拡大

i)学会運営の適正化・効率化

○：水工学委員会が対象となる項目

JSCE2015の目標に対応する活動

使	備	基本	JSCE2015	部門・	5年間のアクションプラン	各年度の関連する活動	対象顧客 (該当項目に○。複数可。その他の場合は、活動内容に具体的な対象を記載)	活動のアウトプット方法 (該当項目に○。複数可。その他の場合は、活動内容に具体的なアウトプット方法を記載)	活動自己評価 ・年度ごとの達成度評価規準は以下の通り A:計画通り実施済み B:概ね計画通り実施済み C:計画通りの実施に至らなかった D:アクションプラン自体の変更が必要														
					目標	委員会	2015年度	2016年度	2015年度	2016年度	2015年度	2016年度	2015年度	2016年度	2015年度	2016年度	2015年度	2016年度					
			a1-2)学会編集論文集掲載論文の国際的認知度の向上	総務		2015年度																	
						2016年度																	
				財務経理		2015年度																	
						2016年度																	
				会員支部		2015年度																	
						2016年度																	
				調査研究	論文掲載基準の厳格な運用と対外広報[拡充]	2015年度	J-STAGEが定める掲載方法の変化への対応も含め、論文集の投稿や内容の活性化・充実を目指すとともに、発刊後間もないJournal of JSCEの対外的な広報に努める	○	○	○													
						2016年度																	
				コンクリート		2015年度																	
						2016年度																	
				水工学	・水工学論文集の国際セッションをより一層充実させる。 ・Journal of JSCEへの投稿増をめざす。	2015年度	・水工学論文集の国際セッションへの投稿を推進する。 ・Journal of JSCEへの投稿増のための広報活動を活発に行う。	○		○		○										A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。
						2016年度	・水工学論文集への国際的な論文の投稿を推進する。 ・Journal of JSCEへの投稿増のための広報活動を活発に行う。	○		○		○											
				a1-3)技術基準のグローバルスタンダード化	総務		2015年度																
						2016年度																	
財務経理		2015年度																					
		2016年度																					
会員支部		2015年度																					
		2016年度																					
調査研究	世界に通用する技術基準を目指す[新規]	2015年度	世界に通用する技術基準の整備に向けた調査研究の推進	○		○																	
		2016年度																					
コンクリート	・コンクリート標準示方書の改訂作業を開始する。その際の方針の一つとして、日本のコンクリート技術の世界への発信に寄与すること、世界に先駆けた内容を持つ魅力的な技術基準を目指すことを掲げる。	2015年度	改訂作業の体制構築と基本方針の策定を行う。具体的には、示方書改訂の際に、海外の技術基準の動向を十分に把握したうえで作業を進める。また国際関連小委員会が担当するニューズレターの発刊や、海外での講習会等を通じて、2012年2013年改訂コンクリート標準示方書の内容(エッセンス)を国際的に周知する。	○	○	○	○	○	○	○													
		2016年度																					
水工学	・水理公式集改訂版を発刊するとともに、河川砂防技術基準と連動した技術の整理・蓄積を図る。 ・ISO/TC113小委員会によりグローバル・スタンダードとの調整も実施する。	○	2015年度	・水理公式集改訂版を発刊し、河川砂防技術基準と連動した最新技術を含んだ統合的な技術の整理・蓄積を図る。 ・ISO/TC113小委員会によりISOによる基準化の方針を確認する。	○		○	○	○									B	次年度も引き続き同様に活動を実施する。				

JSCE2015の目標に対応する活動

使	備	基本	JSCE2015	部門・	5年間のアクションプラン	各年度の関連する活動	対象顧客	活動のアウトプット方法										活動自己評価																		
					水工学	(該当項目に○。複数可。その他の場合は、活動内容に具体的な対象を記載)	(該当項目に○。複数可。その他の場合は、活動内容に具体的なアウトプット方法を記載)										・年度ごとの達成度評価規準は以下の通り A:計画通り実施済み B:概ね計画通り実施済み C:計画通りの実施に至らなかった D:アクションプラン自体の変更が必要																			
1	学	術	技	術	の	確	立	水工学	・水工学委員会の各分会が中心となり、それぞれが関連する他機関と連携し萌芽的研究を発掘する。	○	2015年度	・水文部会と水文・水資源学会、基礎水理部会と混相流学会等の関連する他機関との連携を深め、新しい研究を推進する。	○	○											A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。										
										○	2016年度	・引き続き、水文部会と水文・水資源学会、基礎水理部会と混相流学会等の関連する他機関との連携を深め、新しい研究を推進する。	○	○																						
									a3)災害対応技術の確立	a3-1)災害対応技術の体系化	総務	○	2015年度																							
												○	2016年度																							
											財務経理	○	2015年度																							
												○	2016年度																							
											会員支部	○	2015年度																							
												○	2016年度																							
									調査研究	他機関との連携および共同研究の推進[拡充]	○	2015年度	東日本大震災等の巨大災害を踏まえて、防災関連他機関との臨機で多様な形態での連携による、調査の実施と研究の推進	○	○																					
											○	2016年度																								
									コンクリート	・土木学会内の他の委員会と共同して重点研究課題を提案する。また、コンクリート委員会内の第3種委員会は委員を公募しており、これまでも他分野からの委員の参画を得ているので、この体制を継続する。	○	2015年度	災害対応に資する分野横断型学術領域創出を目指した体制構築、研究課題の提案	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
											○	2016年度																								
									水工学	・水工学委員会内で設置している水害対策小委員会の機能を維持し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを維持・更新する。	○	2015年度	・水工学委員会内で設置している水害対策小委員会の機能を維持、必要に応じて強化し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを維持・更新する。	○	○																			A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。	
											○	2016年度	・引き続き多発する災害に対して、水工学委員会内で設置している水害対策小委員会の機能を維持、必要に応じて強化し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを維持・更新する。	○	○																					
a4)都市再生に資する技術の確立	a4-1)計画・制度、社会基盤施設の維持管理など要素技術の確立	総務	○	2015年度																																
			○	2016年度																																
		財務経理	○	2015年度																																
			○	2016年度																																
		会員支部	○	2015年度																																
			○	2016年度																																
調査研究	関連する要素技術の研究推進[拡充]	○	2015年度	防災を含む都市再生に資する要素技術の抽出・体系化のため、委員会間の横断的連携および研究の推進	○	○																														
		○	2016年度																																	

JSCE2015の目標に対応する活動

使	備	基本	JSCE2015	部門・	5年間のアクションプラン	各年度の関連する活動	対象顧客 (該当項目に○。 複数可。その他の 場合は、活動内容 に具体的な対象を 記載)	活動のアウトプット方法 (該当項目に○。複数可。その他の場合は、 活動内容に具体的なアウトプット方法を記 載)										活動自己評価 ・年度ごとの達成度評価規準は以 下の通り A:計画通り実施済み B:概ね計画通り実施済み C:計画通りの実施に至らなかつ た D:アクションプラン自体の変更 が必要				
					措置を講じる。																	
				水工学	・水工学委員会内に設置されている水害対策小委員会の機能を維持・強化し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを可能とする。 ・土木計画学委員会と連携して流域管理と地域計画の連携を深め、水災害の起こりにくい地域づくり・街づくりを実現するための学術的な検討の場を設ける。	○	2016年度 2015年度	・水工学委員会内に設置している水害対策小委員会の機能を維持・強化し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを維持または更新する。 ・土木計画学委員会と連携して流域管理と地域計画の連携に関する議論を深め、水災害の起こりにくい地域づくり・街づくり実現のため、学術的な検討を進めることが出来る場を設ける。	○											A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。	
							2016年度	・引き続き、水工学委員会内に設置している水害対策小委員会の機能を維持・強化し、横断的かつ迅速な災害調査ネットワークを維持または更新する。 ・土木計画学委員会と連携して流域管理と地域計画の連携に関する議論を深め、水災害の起こりにくい地域づくり・街づくり実現のため、学術的な検討を進めることが出来る場を設ける。	○													
2 ・ 国 内 ・ 同	d)公正な立場からの専門的知見の提供・技術支援等の社会貢献	d1)良質な社会基盤整備への貢献	d1-1)社会資本整備に関する政策提言	総務			2015年度 2016年度															
				財務経理			2015年度 2016年度															
				会員支部			2015年度 2016年度															
				調査研究	専門家の立場より、政策提言を行う[新規]		2015年度 2016年度	政策提言に資する調査研究の推進	○		○											
				コンクリート			2015年度 2016年度															
				水工学	河川懇談会等を通じた国土交通省との連携を推進し、政策提言に向けた活動を実施する。	○	2015年度 2016年度	国土交通省との連携を強化するため、河川懇談会の活動を促進する。 引き続き、国土交通省との連携を強化するため、河川懇談会の活動を促進する。	○			○	○							A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。	
				総務			2015年度 2016年度															
				財務経理			2015年度 2016年度															
				会員支部			2015年度 2016年度															
				調査研究	合意形成過程への積極的な関与[継続]		2015年度 2016年度	巨大災害および事故等の教訓を踏まえて、合意形成を促進する各種取り組みの継続実施と合意形成過程への積極的関与	○		○											
				コンクリート			2015年度 2016年度															

JSCE2015の目標に対応する活動

使 途 際 社 会 に 対 す る 責 任 ・ 活 動	具 備 す べ き 目 標	基本 目 標	JSCE2015 目 標	部 門 ・ 委 員 会	5年間のアクションプラン	各年度の関連する活動	対象顧客 (該当項目に○。 複数可。その他 の場合は、活動内 容に具体的な対象 を記載)	活動のアウトプット方法 (該当項目に○。複数可。その他の場合は、 活動内容に具体的なアウトプット方法を記 載)										活動自己評価 ・年度ごとの達成度評価規準は以 下の通り A:計画通り実施済み B:概ね計画通り実施済み C:計画通りの実施に至らなかつ た D:アクションプラン自体の変更 が必要							
					2015年度	2016年度		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○					
				水工学	・「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を維持し、市民の社会インフラに対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める水工技術の把握に努める。	2015年度	・「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を設け、市民の社会インフラに対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める水工技術の把握に努める。	○	○											A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。				
						2016年度	・「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を設け、市民の社会インフラに対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める水工技術の把握に努める。	○	○																
				d1-6)美しい国づくり、災害に強い街づくり等への助言・支援	総務	2015年度																			
						2016年度																			
				財務経理	2015年度																				
					2016年度																				
				調査研究	専門家の立場より、技術的な提言あるいは支援を行う [新規]	2015年度	技術的な提言あるいは支援に資する調査研究の推進	○		○															
						2016年度																			
				コンクリート	・コンクリート教育研究小委員会が企画する「若手／中堅実務者のためのコンクリート技術講習会」の継続的開催により、若手・中堅実務者のスキルアップを図る。	2015年度	技術水準の向上に資する企画の継続的開催	○		○	○	○	○	○											
						2016年度																			
				水工学	・「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を維持し、市民の水災害に対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める防災技術の把握に努める。	○	2015年度	・「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を維持し、市民の水災害に対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める防災技術の把握に努める。	○	○														A	次年度も引き続き同様に活動を実施する。
						2016年度	引き続き、「水シンポジウム」による市民・土木学会・自治体・国の情報共有と相互討論の場を維持し、市民の水災害に対する知識や意識向上を図るとともに、市民が求める防災技術の把握に努める。	○	○																



IAHR
2017

37th IAHR
WORLD CONGRESS
13-18 August, 2017
Kuala Lumpur, Malaysia

CALL FOR ABSTRACTS
August 1, 2016

Venue:
PUTRA WORLD TRADE CENTRE (PWTC)

Theme:

**MANAGING WATER FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT –
Learning from the Past for the Future**

Organised by :



PCO :





IAHR
2017

37th IAHR
WORLD CONGRESS
13-18 August, 2017
Kuala Lumpur, Malaysia



THEMES

- **THEME 1: RIVER AND SEDIMENT MANAGEMENT**
- **THEME 2: FLOOD MANAGEMENT**
- **THEME 3: ENVIRONMENTAL HYDRAULICS AND INDUSTRIAL FLOWS**
- **THEME 4: COASTAL, ESTUARIES AND LAKES MANAGEMENT**
- **THEME 5: URBAN WATER MANAGEMENT**
- **THEME 6: WATER RESOURCES MANAGEMENT**
- **THEME 7: HYDROINFORMATICS / COMPUTATIONAL METHODS AND EXPERIMENTAL METHODS**

Organised by :



PCO :





Technical visits #1 (SMART Tunnel)




SMART TUNNEL

- Why SMART Project?
- Method of Construction
- SMART Components
- Unique Feature
- Modes of Operation
- Control Centre
- Events
- Mechanical & Electrical
- SMART Administrative Centre

Technical visits #2 (River of Life)



Organised by :



PCO :





Accompanying Persons Programme

Pavillions



Genting Highlands



Food Heaven



Organised by :



PCO :





IAHR 2017

37th IAHR WORLD CONGRESS

13-18 August, 2017
Kuala Lumpur, Malaysia



<http://www.iahrworldcongress.org/>

The screenshot shows the website's navigation menu (HOME, COMMITTEE, PROGRAMME, LOCATION, CONGRESS EVENTS, CALL FOR ABSTRACT, SPONSORS AND EXHIBITORS, REGISTRATION, CONTACTS) and a search bar. The main banner features the event title, dates (13-18 August 2017), and location (Putra World Trade Centre - PWTC). A 'WELCOME' section includes a photo of Peter Goodwin, IAHR President, and a text block about the congress. Logos for NARS, NAHRM, and REDAC are visible. A 'KEYDATE' section is also present on the right side of the page.

KEYDATE	
Abstract Submission	: August 1, 2016
Abstract Notification	: November 1, 2016
Paper Submission	: February 1, 2017
Paper Notification	: April 1, 2017
Paper Correction	: May 1, 2017
Early Bird Registration	: April 30, 2017
Congress	: August 13 - 18, 2017

Find more
about us
#IAHR2017



Organised by :



PCO :



平成28年度の年間スケジュールについて

日時	場所	活動内容
2016年7月11日(月) 12:00-13:00	土木学会	第1回水工学委員会幹事会
2016年7月11日(月) 13:30-16:30	土木学会	第1回水工学委員会
2016年8月22日(月) 23日(火)	秋田大学	水工学に関する夏期研修会
2016年8月25日(木) 26日(金)	山口県総合保健会館多目的ホール	第21回水シンポジウム2016 in やまぐち
2016年10月6日(木)	土木学会	第1回編集小委員会幹事会
2016年10月7日(金)	土木学会	第2回水工学委員会幹事会・第1回編集小委員会
2016年11月9日(水)	土木学会	第3回水工学委員会幹事会・第2回編集小委員会
2016年12月12日(月)	土木学会	第2回編集小委員会幹事会
2016年3月15日(水)	九州大学	第2回水工学委員会

平成28年度 第61回水工学講演会 開催計画

- 場所：九州大学
伊都キャンパス
(〒819-0395
福岡市西区元岡744)



<http://www.kyushu-u.ac.jp/>

- 日程：平成29年3月15日（水）～17日（金）
- 幹事：矢野真一郎（九大），杉原裕司（九大）

会場への交通

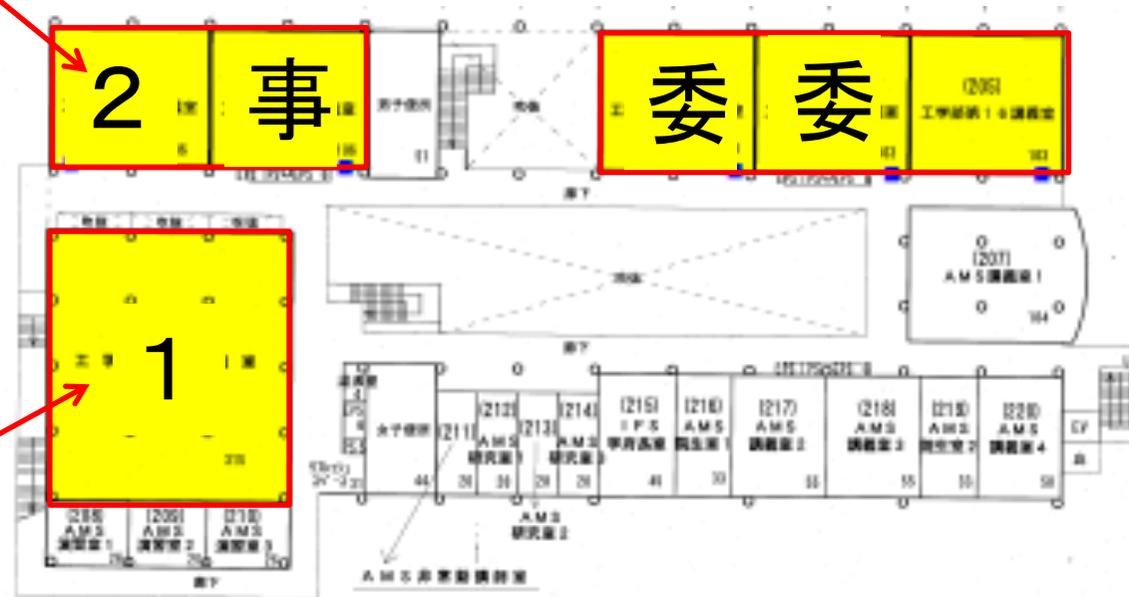
- **推奨:** 地下鉄空港線(JR筑肥線乗り入れ)にて, 福岡空港・博多駅・天神からJR九大学研都市駅まで30分程度. その後, バスで九大工学部まで15分程度.
- 博多駅, 天神から直通バスあり. (1時間程度かかります. 交通状況によっては1時間半以上)



会場

総合学習プラザ:

- 大講義室(222名): **第1会場(開会式, 特別講演, の会場)として使用**
- 工学部第5(88名): 第2会場
- 委員会用会場, 事務局用として2~3部屋*準備可能(50or88名)



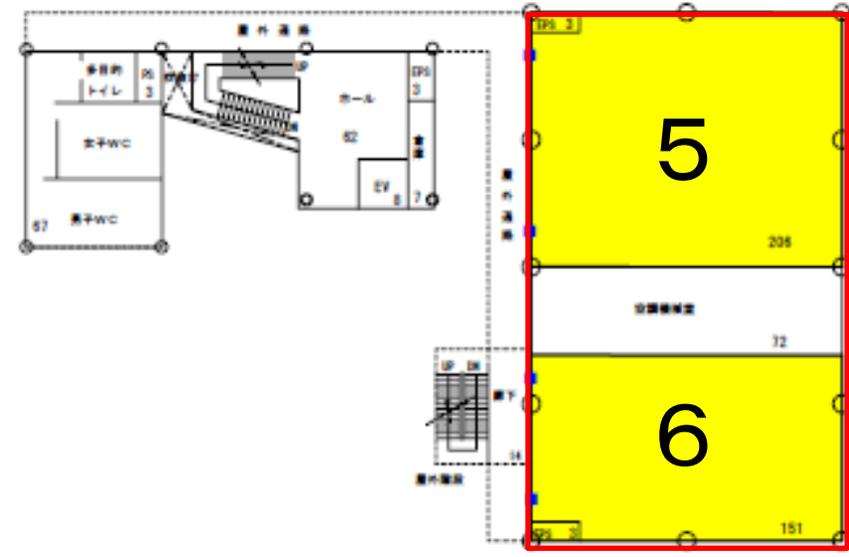
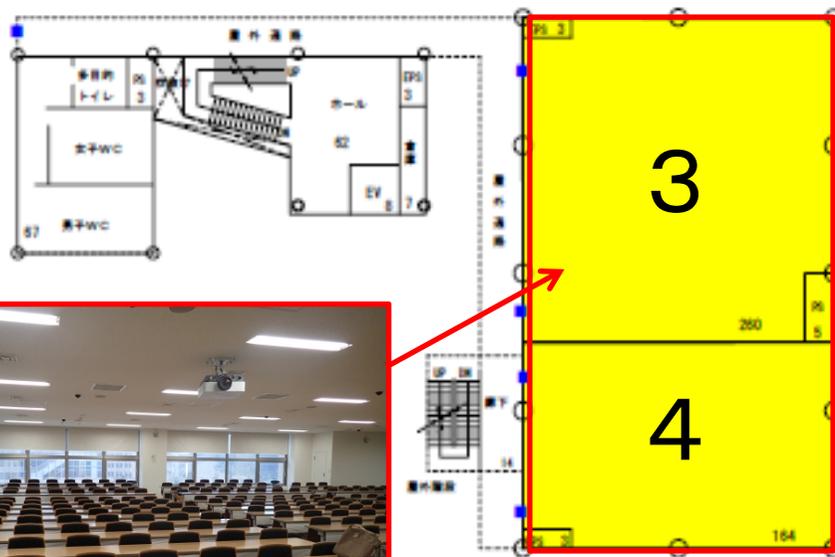
総合学習プラザ2階

会場



- 西講義棟：(第3～6会場)

工学部第1講義室(254名), 第2(133名), 第3(184名), 第4(111名)



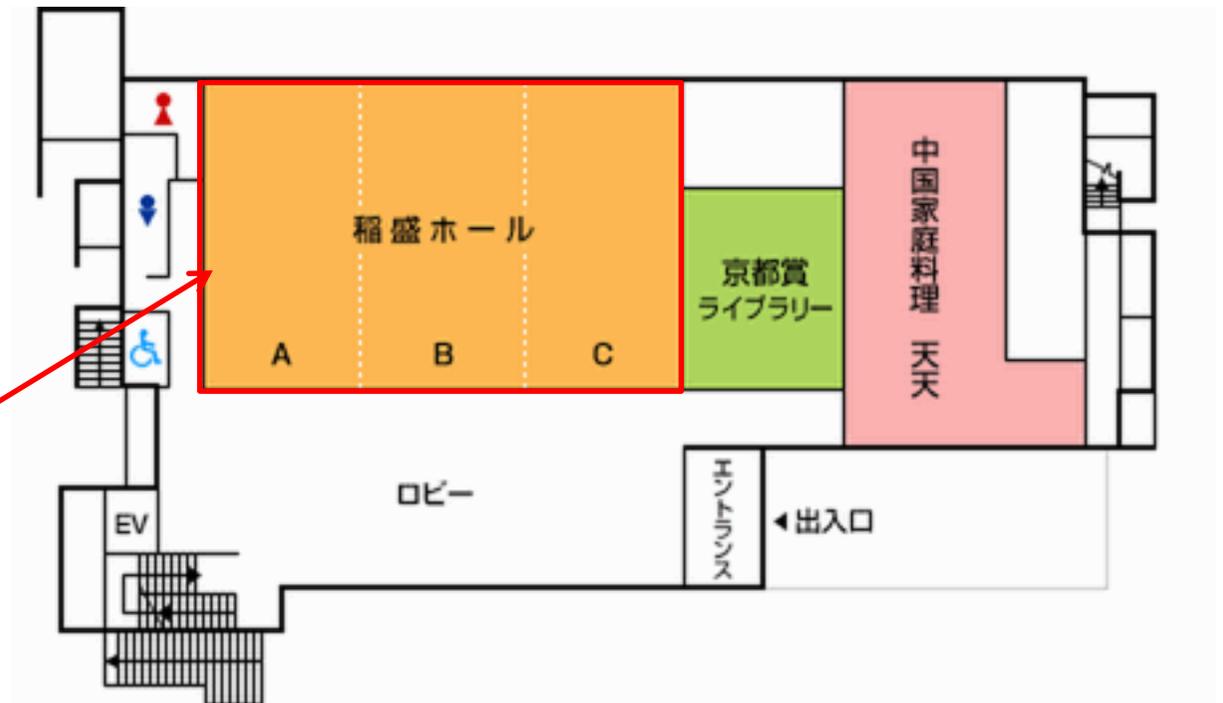
西講義棟2階

西講義棟3階

会場

稲盛財団記念館:

- 稲盛ホール(288名):
アゲール, 河川災害シンポ
の会場として使用

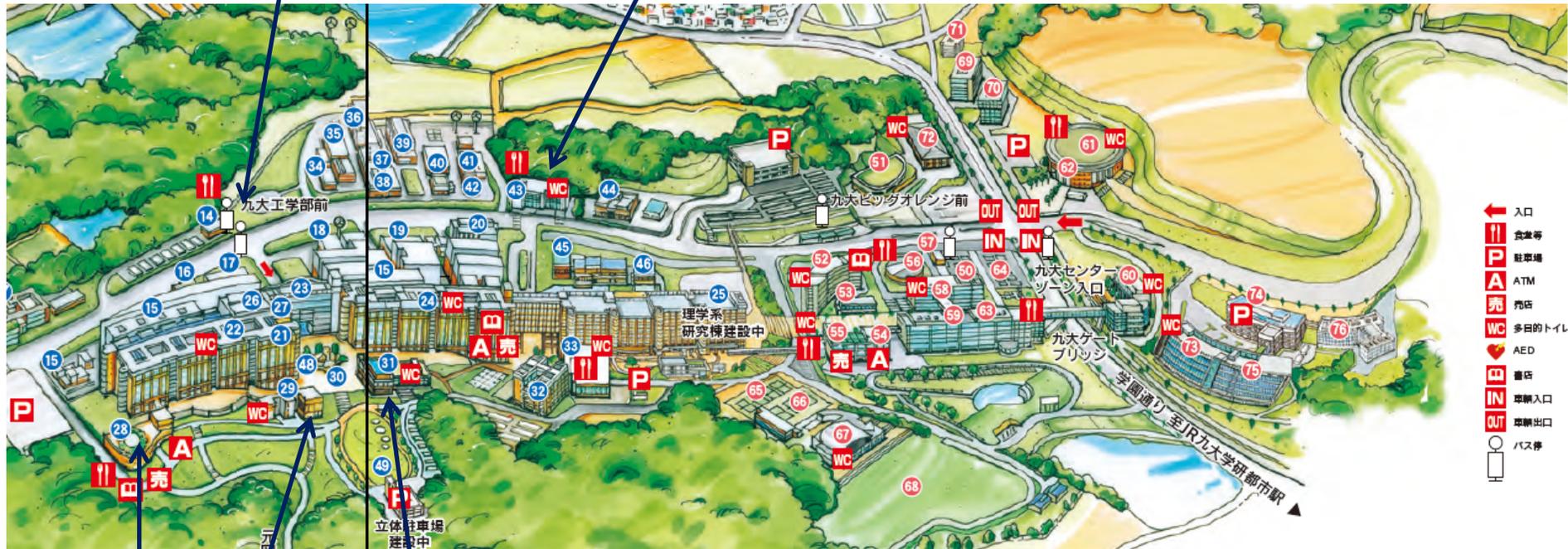


記念館1階

会場

バス停

稲盛財団記念館



西講義棟

工学部食堂

総合学習プラザ

特別講演

- H29年3月16日(木) 15:00-17:30
 - 馬奈木俊介 九州大学大学院教授
「新国富論について(仮題)」
 - 高橋和雄 長崎大学名誉教授
「九州の自然災害とその伝承(仮題)」
 - 進行役: 矢野
- ※両先生には承諾を得ています。懇親会まで参加予定です。

その他

- 食堂など:

会場近辺に学食(2), カフェ(3), モスバーガー, 中華レストランあり. その他, ローソン, 生協など.

- 懇親会について:

工学部食堂1Fを貸し切りで行う予定.

※2次会は周辺駅前に居酒屋等がありますので, 期間中に案内を配布します.

- ホテルについて(重要!):

最近, 福岡ではホテルが非常に予約しにくい状況です. 必ず, 早めにおさえて下さい!

平成29年度 第62回水工学講演会 開催案

- 場所：岡山大学津島キャンパス

(〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1)

<http://www.okayama-u.ac.jp/>

日程：2018年3月5日（月）～8日（木）の内3日

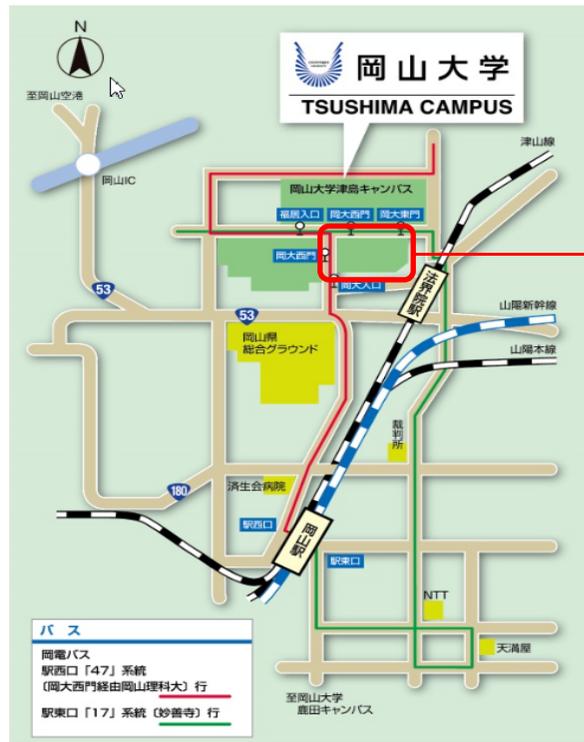
or 14日（水）～16日（金）の何れか

※上記の日程で仮予約済み。

- 幹事：前野詩朗（岡大），吉田圭介（岡大）

交通アクセス

- JR岡山駅から約2.5km. 岡電バス「岡大西門経由岡山理科大」行で「岡大西門」まで10分程度. タクシーの場合8分程度. ラッシュ時は余裕を持って出発して下さい.
- JR岡山駅からJR法界院駅(約4分), 法界院駅から徒歩10分程度(約900m).
- 岡山空港からは, 岡山空港2番乗り場から「岡山駅西口」行で「岡山大学筋」で下車, 徒歩7分程度. ノンストップ便は「岡山駅」で下車, 岡山駅からは上記の各種交通機関を利用.
- 岡山コミュニティサイクル「ももちやり」: 駅周辺と大学にポートがあります. 天気が良ければ駅から大学までレンタル自転車で15分程度.



講演会場

- 一般教育棟B41*(280名): 第1会場(開会式, 特別講演, アゲール, 河川シンポ等の会場)として使用予定
- 一般教育棟A41講義室(255名), 同B33室(183名), 同B32室(124名), 同A37室(121名), 同A36室(120名): 第2~6会場として使用予定
- 一般教育棟A棟一階ロビー: 総合受付
- 委員会用会場, 事務局用として講義室4部屋(61名2部屋, 75名2部屋), 展示室として演習室1部屋を使用予定

*上記講義室・演習室は全て同じ建物です。

その他

- 食堂など:

会場近辺に生協食堂(津島キャンパスに3つ), コンビニ生協売店など.

- 懇親会について:

会場に近い生協食堂3F(100名程度可)を貸し切りで行う予定.

会開催地一覧

水シンポジウム

回	年度	北海道	東北	関東	中部	関西	四国	中国	西部	担当部会
1	1996							鳥取		
2	1997					兵庫				
3	1998		福島							
4	1999			東京						
5	2000								熊本	
6	2001				富山					
7	2002	札幌								
8	2003						愛媛			
9	2004							広島		
10	2005					大阪				
11	2006		宮城							
12	2007				愛知					
13	2008			千葉						
14	2009				新潟					
15	2010								福岡	河川
16	2011					京都				環境水理
17	2012				岐阜					基礎水理
18	2013						高知			水文
19	2014								長崎	河川
20	2015				福井					環境水理
21	2016							山口		基礎水理
22	2017								沖縄	水文
										河川

未 開 催 県	岩手県	茨城県	三重県	滋賀県	徳島県	島根県	佐賀県
	山形県	栃木県	静岡県	奈良県	香川県	岡山県	大分県
	秋田県	群馬県	長野県	和歌山県			宮崎県
	青森県	埼玉県	石川県				鹿児島県
		神奈川県	山梨県				



主催：土木学会水工学委員会
共催：実践水文システム研究会

我が国の レーダ雨量計 研究開発50年の歩み

日時

2016年
10月18日(火) 13:30-17:30

東京大学本郷キャンパス 武田先端知ビル5F 武田ホール (仮)
東京メトロ千代田線 根津駅1番出口徒歩5分

スピーカー(予定)

中北英一 (京都大学防災研究所)

深見和彦 (国土技術政策総合研究所)

森山聡之 (福岡工業大学)

兪 朝夫 (株式会社建設技術研究所)

藤巻浩之 (国土交通省水管理・国土保全局)

コーディネーター (予定)

山田 正 (中央大学)

※敬称略

ほか

定量的な雨量推定 (QPE)、流量推定は極めて重要なレーダ雨量計の意義であるが、さらにそれを乗り越えて定量的降雨予測 (QPF) や流量予測を行い、さらにその有効利用をすることなどの、より安全で快適な河川の管理を行うためにレーダ雨量計を用いた「研究・開発」が位置づけられてきた。今回は土木学会水工学委員会として、レーダ雨量計のハードとしての開発や整備だけでなく、その「研究・開発」とそれに関わった人々の50年の歩みと思いをこれからの研究者・技術者と共有して、うるおいの中にも安心がある国土を今後形成していく、ステップとしたい。

*終了後、会場近くにて、懇親会(有料)を予定しています。
みなさまのご参加をお待ちしております。

ご予約
お問い合わせ

レーダー雨量計50周年記念事業事務局

MAIL: radar50@chikyu.mei.titech.ac.jp

(東京工業大学 土木・環境工学系 鼎研究室)

プログラム(案)

- 13:30～13:35 主催者挨拶(中北英一 水工学委員会委員長)
- 13:35～14:05 レーダ雨量計に関する研究開発の歴史と思い(仮題)
(中北 京都大学教授)
- 14:05～14:15 国土交通省におけるレーダ雨量計開発(仮題)
(深見 土木研究所)
- 14:15～14:45 国土交通省におけるレーダ雨量計開発(仮題)
(水野 国土技術総合政策研究所OB)
- 14:45～15:15 国土交通省におけるレーダ雨量計開発(仮題)
(木暮 国土交通省関東地方整備局)
- 休憩
- 15:30～16:00 国土交通省におけるレーダ雨量計研究(仮題)
(藤原 国土交通省近畿地方整備局)
- 16:00～16:30 大学におけるレーダ雨量計を用いた研究(仮題)
(森山 福岡工業大学教授)
- 16:30～16:45 民間におけるレーダ雨量計の利用(仮題)
(兪 建設技術研究所)
- 16:45～17:30 総合討論
(コーディネーター 山田 中央大学教授)

土木学会論文集の論文数向上のための試みについて

土木学会論文集B1・B2・B3分冊合同編集小委員会
立川 康人（小委員長）・内田龍彦（幹事長）

○経緯

土木学会論文集B部門通常号の論文投稿数、掲載論文数が減少しており、その対策が求められています。土木学会論文集の通常号と特集号（水工学論文集）との違いがなくなっていく中で、編集小委員会では土木学会論文集（通常号）の役割を議論し、採択基準や査読方法などの検討の他に、水工学会や各部会で主催しているシンポジウム等で発表された内容を情報発信していただく場として通常号を活用する案が挙がりました。

○通常号の活用案

- 河川災害に関するシンポジウム、河川技術シンポジウム（招待講演）、基礎水理シンポジウムなど、シンポジウムで発表された内容を論文としておまとめいただき、投稿いただく。
- 水害対策小委員会で調査団が結成された場合、その成果を報告書としてだけでなく論文集に投稿いただいて、数年経った後でも容易に閲覧できるようにする。掲載時期が異なっても、小委員会などで独自に目次を作成いただいて掲載論文に順次リンクを張れば、バーチャルな特集号を組むことができます。
- 水工学論文集との違いとして、通常号には「報告」のジャンルがありますので、これを有効に使うことが考えられます。
- レビュー論文も大歓迎です。

○実行案

- シンポジウム実行委員長などから小委員会委員長（現立川）宛に企画を連絡していただく。
- シンポジウム実行委員長から発表者に投稿を呼びかけていただく。
- 査読者の1～2名はシンポジウム実行委員などの関係者に依頼することとし、迅速な掲載を目指します。2015年の通常号の採択から掲載までの平均期間は、7ヶ月程度となっており、水工学論文集と同様のスピードで掲載が可能と考えています。

Special issueとして特集号を組むことも検討中です。以上の提案について、可能性があるのかどうかについてご意見いただければありがたいです。

水工学論文集編集作業について(会議予定)

開催日	会議	会場
2016年7月11日(月)	第一回幹事会・第一回委員会	土木学会講堂
2016年9月30日(金)	論文投稿締切	
2016年10月6日(木)	第一回編集小委員会幹事会	土木学会AB会議室
2016年10月7日(金)	第二回幹事会・ 第一回編集小委員会	土木学会AB会議室
2016年10月31日(月)	第1回査読期限	
2016年11月9日(水)	第三回幹事会・ 第二回編集小委員会	土木学会AB会議室
2016年11月30日(水)	修正原稿締切	
2016年12月12日(月)	第二回編集小委員会幹事会	土木学会A会議室
2017年3月15日(水)	第二回委員会	九州大学

編集体制について：編集小委員会委員構成（黒字：昨年度実績，赤字：提案）

分野	投稿論文数	委員数(副査のみは 0.5人とカウント)	一委員あたり査読 数
水文	86 (水災害系(18)を除くと68)	18 (14)	9.6 (9.7)
河川水理	108 (水災害系(59)を除くと49)	15 (10)	14.4 (9.8)
流砂	34	8	8.5
河川環境	50	9	11.1
湖沼・ダム	19	4.5	8.4
沿岸	20	6	6.7
水災害・防災・減災	(77)	(14～15名程度必要)	(10～11)

【委員構成】

- ✓ 基本的には昨年度の編集委員，委員兼幹事には継続をお願いする。
- ✓ 一委員あたり平均査読数を12程度までに抑えられることを目標に，水工学委員外の編集小委員会委員（または委員兼幹事）を部会長推薦で加える。
- ✓ 「水災害・防災・減災」分野を新設。「水文」，「河川水理」の中から分野変更＋新規依頼
- ✓ 「副査のみ」の廃止。但し，民間，行政の委員については担当論文数を配慮。

第60回の決算と予算上の課題

第60回水工学講演会 決算

収入	著者負担金送料込み@26,900×231編	¥6,213,900
	論文集販売@5,000×125冊(事前+当日)	¥625,000
	論文集送料	¥78,300
	参加費@3,000×227人	¥681,000
	広告	¥56,700
	製品展示	¥0
収入合計		¥7,654,900
支出	1. 会場関係費(会場使用料)	¥130,000
	2. 会場関係費(PCプロジェクター等の備品)	¥0
	3. 特別講演講師への謝金, 旅費	¥33,410
	4. 編集委員会費(旅費、お弁当)	¥1,215,191
	5. 論文投稿、査読システム運用費	¥1,530,044
	5は印刷 ポスター・プログラム印刷を含む	
	7. 論文集事前発送宅急便代	¥237,820
	8. 宣伝費 a(ポスターデザイン料)	¥30,000
	9. // b(DM発送費等)	¥136,560
	10. 事務局関係(職員出張費等)	¥0
	11. 学生アルバイト	¥610,000
	12. 通信経費・連絡費	¥0
	13. その他 a(J-Stageアップロード(土論指定業者))	¥134,460
	14. // b(期間中の委員会、部会お弁当代)	¥230,000
	15. // c(事務用品・資料印刷)	¥81,008
	16. // d(会場案内看板)	¥0
	17. 定期購読買上(出版部門)	¥0
	18. 参加券作成	¥0
	19. 管理費(30%)	¥2,296,470
支出合計		¥6,664,963
収支差額		¥989,937

予算上の課題

- ✓ 第59, 60回ともに会場費, 会場関係費が少額 (国立大開催に比べ概ね40~50万円程度の負担減). 第60回はシステム運用費も40万程度減.
- ✓ 水工学委員会予算から旅費などを30万円程度支出(委員会予算は繰り越せない)

⇒ 会場費, システム運用費, 委員会旅費などを**安全目に見積もり, 収支均衡**で健全状態

- ✓ 参加費への不満(参加費: 第55回から)

⇒ **参加費なし**を提案

- ✓ 通常号, 他分冊特集号の著者負担金
 通常号(7-8頁の場合) : 40,000円
 特集号(海岸工学) : 35,000円
 特集号(水工学) : 26,900円

⇒ **著者負担金の増額(35,000円)**を提案

決算と予算案

第60回水工学講演会 決算

収入	著者負担金送料込み@26,900×231編	¥6,213,900
	論文集販売@5,000×125冊(事前+当日)	¥625,000
	論文集送料	¥78,300
	参加費@3,000×227人	¥681,000
	広告	¥56,700
	製品展示	¥0
収入合計		¥7,654,900
支出	1. 会場関係費(会場使用料)	¥130,000
	2. 会場関係費(PCプロジェクター等の備品)	¥0
	3. 特別講演講師への謝金, 旅費	¥33,410
	4. 編集委員会費(旅費、お弁当)	¥1,215,191
	5. 論文投稿、査読システム運用費	¥1,530,044
	5は印刷 ポスター・プログラム印刷を含む	
	7. 論文集事前発送宅急便代	¥237,820
	8. 宣伝費 a(ポスターデザイン料)	¥30,000
	9. " b(DM発送費等)	¥136,560
	10. 事務局関係(職員出張費等)	¥0
	11. 学生アルバイト	¥610,000
	12. 通信経費・連絡費	¥0
	13. その他 a(J-Stageアップロード(土論指定業者))	¥134,460
	14. " b(期間中の委員会、部会お弁当代)	¥230,000
	15. " c(事務用品・資料印刷)	¥81,008
	16. " d(会場案内看板)	¥0
	17. 定期購読買上(出版部門)	¥0
	18. 参加券作成	¥0
	19. 管理費(30%)	¥2,296,470
支出合計		¥6,664,963
収支差額		¥989,937

第61回水工学講演会 予算案

収入	著者負担金送料込み@35,000×230件	¥8,050,000
	論文集販売@5,000×100冊(事前+当日)	¥500,000
	論文集送料@900×70部+450	¥63,450
	参加費(なし)	¥0
	広告	¥50,000
	製品展示	¥0
収入合計		¥8,663,450
支出	1. 会場関係費(会場使用料)	¥500,000
	2. 会場関係費(PCプロジェクター等の備品)	¥100,000
	3. 特別講演講師への謝金, 旅費	¥100,000
	4. 編集委員会費(旅費、お弁当)	¥1,600,000
	5. 論文投稿、査読システム運用費	¥2,000,000
	5は印刷 ポスター・プログラム印刷を含む	
	7. 論文集事前発送宅急便代	¥250,000
	8. 宣伝費 a(ポスターデザイン料)	¥30,000
	9. " b(DM発送費等)	¥140,000
	10. 事務局関係(職員出張費等)	¥150,000
	11. 学生アルバイト	¥600,000
	12. 通信経費・連絡費	¥20,000
	13. その他 a(J-Stageアップロード(土論指定業者))	¥200,000
	14. " b(期間中の委員会、部会お弁当代)	¥300,000
	15. " c(事務用品)	¥34,415
	16. " d(会場案内看板)	¥40,000
	17. 定期購読買上(出版部門)	¥0
	18. 参加券作成	¥0
	19. 管理費(30%)	¥2,599,035
支出合計		¥8,663,450
収支差額		¥0

通常号フォーマットとの統一について

昨年度の議論

- ・通常号とフォーマット統一する方向で検討
- ・和文要旨が追加になるので、上限ページ数を8ページに

通常号投稿者(2014～現在)に懸念事項があるかメールにて意見照会.

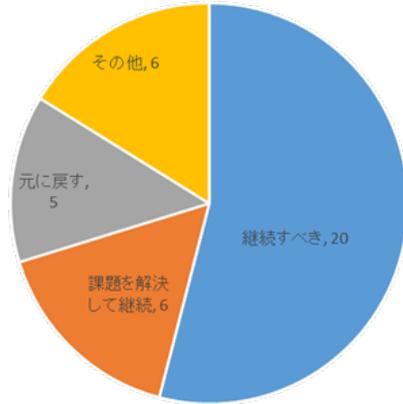
(回答)

ご回答いただいた皆様, **特に大きな問題はないと思う**, との回答のうえで. .

- ✓ Word組版は上手くいかないときの原因分析が難しいので, 組版使用が強制されると混乱が起きる可能性あり. 特に締め切り直前.
⇒ 組版の使用は強制しない. まずは体裁の統一のみ.
- ✓ なんとなく8ページ埋めなくてはいけなくなる雰囲気にならないでほしい.
⇒ ページ数の表現を6～8ページとしては.
- ✓ 風物詩となっている締め切り間際の通常号への間違った投稿を見抜けなくなる.
⇒ あきらめる?

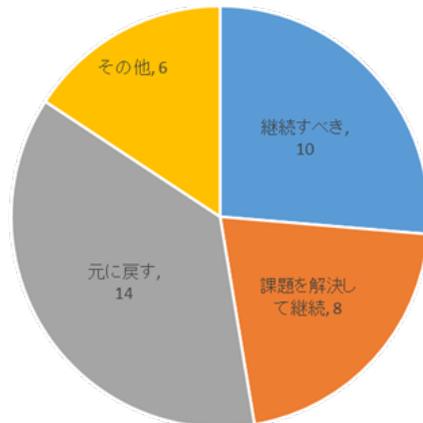
第60回講演会での試行へアンケート結果①

1. 国際セッションと通常セッションの融合



- 留学生にとって良かったのか？
- 日本語論文・英語発表のような形態を認め、英語発表は通しでまとめては？
- 質疑、総合討議に留学生が加われないケースが見られた

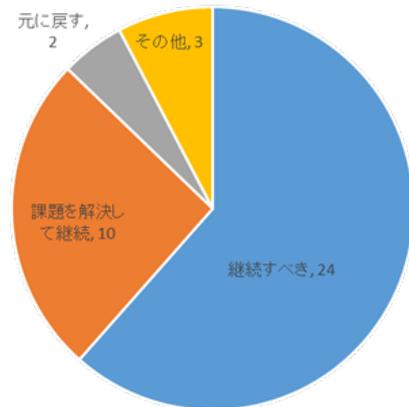
2. 日本語口頭発表についてスライドの英語化の推奨



- 徹底されていなかった。理解しづらかった。
- キャプション、軸、キーワードなどの英語化（あるいは日英併記）が良いのでは？

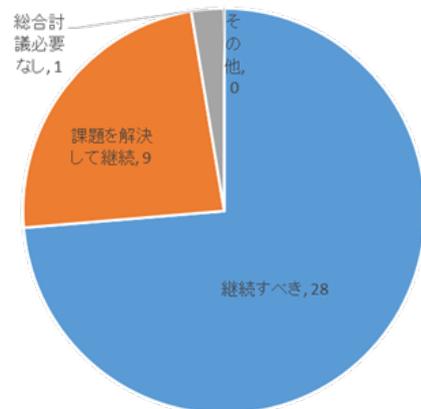
第60回講演会での試行へアンケート結果②

3. 司会者2名(シニア・中堅+若手)体制



- 若手ペアを探すのが大変だった
- 若手とシニアの役割分担が明確でない
- 査読に関わったものが司会すべき

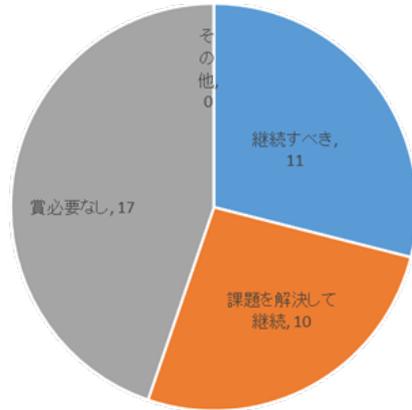
4. 総合討議の設置



- 進め方がセッションによってバラバラだった
- 発表間の関連が薄いセッションでは難しかった
- 個別質問のみに終わることも多かった

第60回講演会での試行へアンケート結果③

5. アウトスタンディング・ディスカッション賞の試行



- 若手を優先すべきと思ったが、シニア・中堅が議論の中心になる傾向があった。
- 賞が活性化に寄与したのか検討が必要。
- 評価項目を明確にすべき。選考基準が司会者により異なる。

6. その他

- ✓ 分野横断型セッション(温暖化など), 院生主体の企画セッション
- ✓ 開催時期, 開催期間に関する意見
- ✓ 論文査読への意見(議論の種になるような論文の扱い)
- ✓ CD-ROMよりUSB

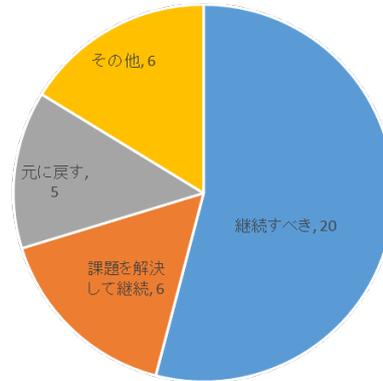
第 60 回水工学講演会に関するアンケート集計結果

1. 国際セッションと通常セッションの融合

実施内容：英文論文・英語での口頭発表について、特に国際セッションとして別会場で開催せず、研究内容として関連が深い通常セッションに配置しました。

(総回答数 37)

- 【20/37】 継続すべき
- 【 6/37】 課題を解決して継続すべき
- 【 5/37】 元に戻すべき
- 【 6/37】 その他



〔自由記載欄〕良かった点、課題、改善案などご自由に記載ください。

○ ポジティブ

- ・ 今後の水工学会の発展に向けて良い試みだったと思います。ただし、質問が出ない場合の対応などに苦慮する点が見られたため、司会以外（例えば査読者等）に聴講および質問が出ない場合の対応などを予めお願いできると良いかと思います。
- ・ 国際化の推進はあらゆる分野で急務なので、世の中の最先端に行く学会が英語・日本語の区別にこだわっていると、世間や他分野に後れを取ると思います。現状では、レベルの違い（英語論文の方がレベルが若干低い）や語学力の問題（日本人は英語が苦手）が散見されますが、継続してゆくことで自然と解消してゆくと思います。むしろ、和文に対してですら、大学院生やポスドククラスの若手から質疑があまり出ないことのほうが問題だと思います。
- ・ 国際セッションは、留学生だけが集まる形が多く見受けられるのでなくてもよいと思います。ただし、総合討論は日本語主体で行われるので、留学生に意見を求めるのは厳しいと思います。
- ・ 我々にとっては、関連分野の発表が一度に聞けて良かったと思いますが、日本語のわからない留学生にとって良かったかどうかは不明。
- ・ 国際セッションという枠組みを廃止し、英文和文の区別なく研究内容でセッションを組み立てる。国際セッションの賞も必然的に廃止。
- ・ 英語の発表に対して英語で議論するのはよいとして、議論をすることに目的を置くなら日本語で質問して英語で答えることや、日本語の発表に対して英語で質問し、日本語で答えるなどもっと自由できる雰囲気にしてもよい。例えば英語発表だが、日本語のリスニングは OK とか、事前に座長に連絡があったらもう少し議論が活発になるのかもしれない。日本人も英語リスニングでも日本語で応答できれば気は楽。
- ・ 今回の試行の意図や背景は、十分に理解でき、共感でき、方向性としては賛同できるものです。しかし、学会時の昼食時間中などに留学生達から幾つか意見を聞きまして、以下のような問題点が残って

いるような気がしました（英語のみが分かる人のことを留学生という名称で代表しております）。

-留学生は、英語スライドでおおよその内容は理解できたとしても、口頭での発表や議論が全て日本語で行われている場合は、質疑や討議には参加しにくい。

-総合討論が、結局、日本語で行われてしまう。

-英語での発表がなかったりあったりというタイムテーブルのため、会議中、留学生は手持ちぶさたになりやすい。あるいは、自分の発表時以外に学会会場へ来るモチベーションが下がりやすい。

-今回は日本語で発表されていたプレゼンテーションでも、プレゼンテーションとしては英語で発表を行なっても差し支えないだろうという発表も多くある。

上記の点と、以下の「2」や「6」で回答した内容を踏まえ、あくまで例えばですが、以下のような手があるかと思います。あくまで例えばです。

- ・ A 論文タイプ 1（論文は和文でも英文でも OK。学会当日は英語のみで発表および議論）

- ・ A 論文タイプ 2（論文は和文で、学会当日も日本語での発表および議論）

- ・ B 論文（論文は和文でも英文でも OK で、査読は簡略。学会当日も日本語でも英語でも OK で、口頭発表は紹介程度で短く、主としてポスターセッションでの発表。ポスターは日本語でも英語でも構わない。）論文のほうを英語で書くのは大変です。そこは日本語を残して構わないと思います。ただ、災害の報告をはじめ日本語でないとニュアンスが伝わらない研究発表もあろうかと思いますが、一方で数値解析など、かなり科学・技術寄りでは英語でも構わない発表も多々あろうかと思いません。そうしますと、あくまで一つの案としてですが、上記のようなタイプ分けに思い至りました。いずれにしても、何らかの形で、英語で通すセッションは全て英語で通すように、またそのような英語で通すセッションは複数連続するように、お願いしたいと思います。留学生および外国人研究員は、これからも日本の大学院および研究において、重要な役割を果たすものと考えられますので。一方で、日本語でのセッションは、思い切って、全部日本語で通すということで構わないと思います。

- ・ 発表は良いが、各セッションの総合討論の際には、日本語での議論に留学生が参加できないという問題がある。日本語の議論を適宜英訳しつつ、などの工夫が必要だと思います。

- ・ 関連する発表は同じセッションの中で連続してあった方が議論が活発になり、発表者にとっても聴講者にとっても有意義なものになると思います。

- ・ 英語発表を入れ込むことで、国際的な場での論文投稿への刺激にもなり、しばらく継続するのがよい。

- ・ 留学生、日本人学生、研究者の全てにとって、各々の立場において良かったと思います。特に、留学生の交流は年講の Sum. Sym. で可能であるために、特に水工で留学生や国際として英語発表を集める必要は無いと考えます。

- ・ 今回の私が受け持ったセッションに国際セッションがなかったため、その他としました。バラバラの分野を一つにまとめて国際セッションとするよりは、今回のほうが発表者にとっても、聞いている人にとっても有益だと思いました。

- ・ 国際セッションだけを集めても、その分野の専門家がそのセッションに集まるかどうか分からないが、通常のセッションに入れると、そのような問題がなくなり議論が活発に行われると思われる。

- ・ 少しでも外国人の方の理解をという姿勢はとてもよいと思います。現にいつも 1 日もしくは 2 日しかも一部の時間のみでいなくなってしまう留学生の方が全てのセッションに参加していたように思います。しかし、総合討論など英語で行っていないため、とても残念に感じる部分もありました。

- ・ 今回の試みは、留学生が他大学・他研究機関の先生方から研究に対するコメントをいただくための良い機会になったと思います。特にセッション名流砂(2)では英語発表に対する活発な議論がなされており、成功事例として挙げられると思いました。

▲ ネガティブ

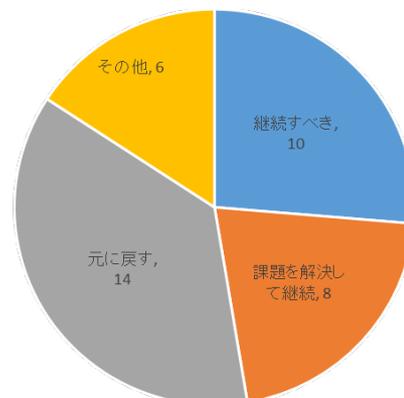
- ・ 英語での論文執筆は、国内の研究成果を広く波及させるために重要であると思います。しかし、口頭発表を英語で行うのには賛成し兼ねます。水工学講演会は、口頭発表の場で研究者同士が議論し合いながら、国内の水工学研究のレベルを高めるための場と私は認識しています。そのため、英語での口頭発表は、短い時間の中で、集中して発表と討議を行うための妨げになるのではないかと懸念しています。
- ・ 留学生等にとっては、同セッションで行われる日本語の発表は理解できないのではないのでしょうか。セッションを分けたほうが、それぞれの場で質疑応答が活発になると思います。
- ・ 留学生の意見を少数でいいので集め、それをもとに判断されるのがよいかと思います。〇〇大にはたくさん留学生がいるので、〇〇大の先生方が研究室の留学生に聞いてみられたものを集計取られるのがよいかと思います。
- ・ 課題点は、発表者が本人以外の日本語の発表と総合討議について、時間を持て余していた。
- ・ 私自身は継続で良いと思いますが、留学生や外国人教員の意見が重要と思います。彼らが「国際セッション」の方が良かったなら、そうした方が良いのではないのでしょうか？
- ・ 英語発表者の質疑はこれまでと同様であったが（決して活発ではないが、形にはなっていた）、セッション最後の総合討議の時に、英語発表者が輪に加わっていないケースが多かった。
- ・ 総合討議が英語になると、特定の人だけが発言し、結果として盛り上がり欠けてしまう場合もある。国際と通常との融合を続けるなら、総合討議を取り止める、総合討議を続けるなら、国際と通常を分けるほうがよいと思う。
- ・ 日本語論文に対する発表の場合、英語スライドで日本語の説明となりますが、発表内容の理解が浅くなってしまうことが懸念されるかと思いました。国際セッションと通常のセッションで分けた方が、それぞれにおいてより深い討議に繋がるかと思いました。
- ・ 判断は発表した外国人学生の意見も聴取して決めるべきであるが、今回の形よりは昨年までの方が望ましいと考えます。また、国際セッションの論文賞は、昨年までの形式に合うものと考えており、今回のように変更するならばこの賞は見直すべきではないのでしょうか。

2. 日本語口頭発表についてスライドの英語化の推奨

実施内容：通常セッションに参加している留学生などが、日本語での研究発表を理解できるよう、日本語で口頭発表される場合も、出来るだけスライドは英語化していただきました。

(総回答数 38)

- 【10/38】 継続すべき
- 【 8/38】 課題を解決して継続すべき (
- 【14/38】 スライドの英語化を特に要請する必要はない
- 【 6/38】 その他 (自由記載欄にご記入ください)



〔自由記載欄〕良かった点、課題、改善案などご自由に記載ください。

○ ポジティブ

- ・ ○○先生はスライドの英語をやめろとおっしゃっていましたが、私は話を聞いていればスライドの文字など読む必要はなく、日本語を読めない人は話が分からないのでスライドを読む必要があるという点で、情報が多チャンネルになっていて大変よいと思いました。逆に日本語のスライドの文章は不要です。図表の英語は水工学論文集に投稿されている方々であれば全く問題ならないでしょう。
- ・ 継続でよいと思います。英語だと理解しづらい日本人聴講者もいらっしゃるかもしれませんが、説明は日本語が大半でしょうし、論文集も日本語でしょうし、問題ないと思います。今回はやや急な話だったためと思われるが、編集委員でも日本語スライドの発表がたくさんあったと思います。「推奨」しながら編集委員がそれに従ってないじゃん、という状況はあまりよろしくないでしょうから、そのあたりが来年度の課題でしょうか。
- ・ セッションが日本人だけの場合、理解を阻害する可能性があるが、留学生などへの配慮もあって良いと思う。ただ、継続すべきかどうかはよく分からない。
- ・ 外国人の方の参加と理解を促したという面ではとてもよい試みであったと思います。しかし、英語スライドのみでは、わからないことが多く、留学生にとってはかなり酷な状況だったのではないかと思います。実際に数人の外国人の方が国際セッションにしてくれた方がよいのと言っておりました。今後、国際セッションを行わず、かつスライドの英語化を推奨していくのであれば、やはりセッションの使用言語をすべて英語にすべきかと思います。日本語での発表・議論を希望する人もいらっしゃると思いますので、言語を選択できるようにすればよいのではないかと思います。
- ・ スライドを英語化しても特に問題はなかったと思います。
- ・ 質問項目1に関連して、日本人以外がセッションに参加している場合、スライドだけでも英語になっていけば研究をある程度理解することができるため、継続するべきだと思います。今回は日本語で作成されたスライドが多く見受けられたため、今後はより多くの方が英語で作成されることが望ましいと思いました。

▲ ネガティブ

- ・ 実際に留学生に役立ったのかを彼らに調査して判断すれば良いのではないのでしょうか？
- ・ ほとんどの発表者が日本語のスライドで発表していました。周知の徹底が図れないようでしたらあまり意味がないかもしれません。また、議論が深まらないような点も見られました。
- ・ 手間が掛かる。留学生を含めた議論の活性化につながっているとは思えない。
- ・ 留学生にとっては理解しやすくなるかもしれませんが、聴衆の大半は日本人です。日本人にとっては、耳からは日本語、目からは英語の情報が入って混乱するため、内容に対する理解度が低下してしまい、深い議論ができないと思います。また、単語や文法に誤りが多い発表も見受けられ、留学生にも内容が正しく伝わらなかったのではと思いました。
- ・ 出来るだけは少し強制力が強い。説明がないので、ぱっと一目でわかる程度の英語に留めておくべき（キャプション、軸、キーワードなど）。ネイティブでない英語はどうしても長い分かりにくい文になり、スライドの文字が多くなり、スライド全体が分かりにくくなっているものも散見された。スライドの質が落ちるようならしない方がよい。そもそも日本語のリーディングが苦手な留学生が多いのか少し疑問であるし、今回英語化した日本語発表でも留学生が日本語発表に対して質問などをした例はほとんどなかった。しかし、留学生を交えて議論が活発化するように工夫することは賛成である。
- ・ 日本語で話しているのにスライドが英語だけだと、やはりわかりにくいように思いました。負担は大きくなりますが、できるだけ日本語と英語を併記するようにしたほうが良いように感じました。
- ・ 上の「1」についての回答と重なりますが、日本語でやるものは日本語で、英語は英語でと、そこはそれぞれの言語で統一したらどうでしょうか。
- ・ 発表する言葉と書いてある言葉の言語が違うので発表者、聴衆共に混乱してしまう。スライドは日本語と英語を併記、あるいは基本は日本語で適宜英語を添える、という方法もある。
- ・ 可能な範囲でのスライド英語化の推奨自体はよいと思うが、基本的にすべて英語化すると受け止められるように要請する(**must** にする)必要はないと思う。数式や図などはよいが、文字主体の内容など、日本語の方が(学会時の限られた)短時間で速やかに理解できる内容もあるように思う。
- ・ 口頭発表が日本語でスライドが英語であり、言語が一致していないために発表内容の理解が少し難しく感じる場合があります。特に少し専門分野が異なる発表に対してそのように感じました。そこで、スライドは日本語で準備するのを基本として、学術用語やキーワード、重要な内容のみを英語で記述もしくは併記する、あるいはその逆で、基本は英語で準備しておき、重要単語や内容を日本語で併記するという方針であれば、全ての聴講者にとってより理解がしやすくなるのではないかと思います。
- ・ 元々、日本語で書かれていた序文や目的、結論を長々と英訳している場合も多く、そのように長い英語だけの文章は読まれないと思いました。
- ・ 「発表言語が日本語でスライドが英語」という組み合わせでは、発表の言葉もしくはスライドのいずれかのみ集中せざるを得ません。言語を統一した方が良いと感じました。とはいっても学会の趣旨から日本語しかあり得ないと思いますが。。。。ただし、1. のセッションを融合することに関しては良いと思いますので、日本語ベースでキーワードのみ英語でも“合わせて表記”が良いと思います。
- ・ CD 論文や説明言語が和文なので中途半端に思いますが、当面、発表者の負担にならない程度に、工夫できる範囲で英語を併記してくださいということかと思います。留学生の意見もうかがってはどうか

でしょうか。

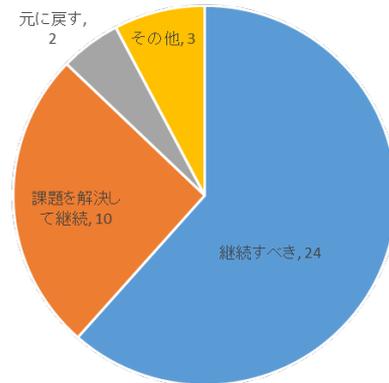
- 当日は、英語記載レベルにばらつきがあった。また、英語発表の存在しないセッションが存在し、そうした場合でも英語プレゼンが必要かどうかについては検討の余地が残る。英語プレゼンの周知が遅かったことへの改善、英語ありセッションとそれ以外とで英語スライドが必要かどうかの議論等についての検討が必要かと思います。
- 当該セッションに英語発表者がいる場合には外国の方もおられましたが、そうでない場合は聴講者も日本人のみというセッションが大半だったように見受けられました。前者の場合は、英語化を推奨すべきですが、後者はむしろ確実な理解のためにも日本語スライドのほうが良かったように感じました。
- 学生にとっては、少しハードルが高いかもしれませんが、日本で話を聞いていますので、なんとかなるのかもしれませんが。すべてのスライドが英語ではなく、背景目的と結論は日本語もしくは、英語と日本語の併記をしてもよいとしてもいいかもしれません。事前の周知が徹底していなかったため、守られている人とそうでない人がいた。民間企業の方にとっては、あまりメリットがないような気がします。
- 発表とスライドの言語が同じ方が理解しやすいように思います。論文を日本語で書いた場合でも、英語で発表する選択肢があるといいのではと思いました。
- 有効活用されていたかは、不明でした。
- 国内会議なので、スライドだけを英語にする必要はない。理由は下記のとおり。
 - 大部分を占める日本語使用者にとって、日本語の方が理解しやすい。
 - ごくわずかな留学生に配慮するのは全体としてマイナス。
 - 日本で学ぶ留学生であれば、日本語であっても、ある程度は理解できる。
- 外国人のいないセッションもあり無駄が多いような感じがあった。著者に強いる必要もないのかもしれない。スライドが日本語と英語と半々となっているものもあり、スライドが見にくいものが見られた。図表のタイトルのみを英文化する程度で良いのではないか（発表は日本語なので）。
- 国際と通常の融合を続けるのであれば、スライドは日本語と英語の併記にするほうがよい。発表が日本語でスライドが英語だけだと、理解するのに時間を要する。また、留学生のためにはなっても、日本人院生(博士前期課程)の学生への配慮が欠ける結果になっていると思う。
- 特に必要とは考えません。むしろわかりにくくなってしまったような印象を持ちます。

3. 司会者2名（シニア・中堅＋若手）体制

実施内容：若手研究者の議論への積極的な参加や、司会者経験の機会を設けるため、シニア・中堅の司会者と若手司会者とのペア体制を試行しました。

（総回答数 39）

- 【24/39】 継続すべき
- 【10/39】 課題を解決して継続すべき
- 【 2/39】 元に戻すべき
- 【 3/39】 その他（自由記載欄にご記入ください）



〔自由記載欄〕良かった点、課題、改善案などご自由に記載ください。

○ ポジティブ

- ・ 大変良い取り組みだったと思います。上記1にも記述しましたが、会場では若手からの質問が少なく、シニア・中堅からの質問が多かったので、若手を強制的に議論に参加させるという意味でも司会を行っていただくのは有意義でした。一応、議論の収束役として中堅司会者が控えていれば、若手も安心して進行できますし、顔の売り込みにもなりますので、大変結構だと思います。
- ・ 若手研究者の顔を認識できるまたは覚えてもらえる点としては良い試みだったと思います。また、若手が論文をレビューする良い機会だと思います。改善点としては、シニア・中堅と若手との役割分担が明確にされておらず、セッションによってはあまり意味がないところも見られました。また、若手は各支部で座長を行う経験を有しているため水工学会でも行う意味があるかは判断が難しいところかもしれません。
- ・ すでにいろいろとご意見があるようですが、「若手」の先生を選ぶのが難しかったです。ただ、次の「総合討議」とも関連しますが、二人体制はいいように思いました。とくに総合討議のときに司会が二人いると、ディスカッションの幅が広がるような気がいたしました。
- ・ 2人体制自体は良かったと思います。ただ、もし続けるという場合は、若手相棒捜しが大変になってくると考えます。今回は初回だから相棒を探しやすかったのですが、毎回、各個人ベースで探すのは、なかなか大変な気がします（初回は、手持ちの候補の中で一番声をかけやすいところに声をかけするので可能だったわけですが、毎回同じ人というわけにもいきませんし）。そうしますと、事務局・幹事・委員会側に指名をお願いしたほうがよさそうです。知らない方とコンビを組むのも、新たな出会いということで、悪くないと思います。ただ、人数名については多数の指名は大変でしょうから、たとえばですが、2人セットで2セッション担当というのはどうでしょうか？ セット・コンビそのものは変えてもよく、各人が2つのセッションの座長を担当するということです。また、準備として、若手司会候補についてもリストアップをしておいて、表を事前に整備しておけば、多少は作業が楽になるのだろうと考えられます。
- ・ 若手の司会者が進行を務めたことで、全体として若手からの質問を優先しようという雰囲気ができ、

年齢を問わずに活発な議論が行われたと感じました。これは学会として非常に有益だと思いますので、是非とも継続していただきたいと考えています。なお、私が参加したセッションでは、若手の司会者はどなたも問題なく進行をお務めでしたので、サポートという意味ではシニア・中堅の方に司会をお願いしなくてもよいかもしれません。

- ・ 司会と指定討論者（年長者）という体制も認めて、柔軟に対応しても良いと思います。
- ・ ペアは試みとしてよいが、若手にはアシストでなく、十分役割ももたせるべき。しばらく試みを継続するでよい。
- ・ 次の4. と関連しますが、セッションとしてのまとめや議論の充実で有用だったと感じます。
- ・ 若手だけでもいいとも思いましたが、議論白熱の終止符を打つときなどのためにシニア・中堅と組んでいる体制がよいと思います。
- ・ 個人的なことですが、若手司会者としてシニア・中堅の司会者と接点がなかったため、良い機会を持つことができました。
- ・ 司会を担当して、良い経験になりました。
- ・ 若手にとって刺激、励みにもなるでしょうし、若手と中堅・シニアが知り合うきっかけにもなるので賛成します
- ・ 若手の方が前面に出てよかった。
- ・ 若手に積極的に学会に参加していただくのは良いことだと思う。ただ、分野により、適切な人を見つけるのが難しいこともある。
- ・ 若手に座長の機会をいただけることは大変よいことだと思います。ただし、以下に多少記載しますが総合討論などのさまざまな機会を効果的に活用しようとするシニア・若手の各司会者の姿勢・十分な準備の改善が必要かと思います。
- ・ 若手研究者は司会進行が不慣れ、もしくは初めてであるケースが多いため、シニア・中堅の司会者とペア体制で座長を行うことで様々なサポート・アドバイスを受けられ、大変ありがたいと思いました。また、パーマネントの職を得られていない若手研究者としては、自己の存在をアピールするために大変ありがたい機会だと思いました。
- ・ 総合討議を続ける場合は、シニア・中堅の方が若手研究者を補佐するという今の体制を継続していくのは良いと思います。そうでない場合は、いままでのように司会者1名であっても良いと感じました。
- ・ 私自身が若手司会者として進行役を経験させて頂きましたが、とても貴重な経験となりました。ありがとうございました。
- ・ 若手研究者が、セッションの内容をしっかりとまとめようとする姿勢を感じました。続けるのがよいかと思います。なお、一部セッションに年配の方も折られたようにお見受けしました。助教であれば若手とは限らないので、若手研究者の選定は課題だと思います。

▲ ネガティブ

- ・ セッションによって、運営の仕方がバラバラだったようです。ある程度の統一（またはモデルの提示）が必要では？中堅の方にもあまり慣れていないように見受けられる場合もあったようです。
- ・ 若手の確保。事務局・執行部が若手まで含んだ座長を計画すべき。
- ・ 探すのに苦労する。ところで2名座長制のメリットは十分議論されたのか？実際、確かに該当セッシ

ョンでは若手司会者は発言せざるを得なかったがそれ以外で彼らが多くの議論に参加したのかについては疑問がある。もっと気長な問題？ただ、会場からの質問が無い場合などは座長・発表者の二人だけの形式的な話になりにくいのは2名制のメリットか。

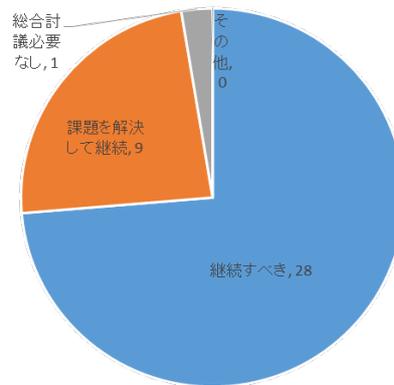
- 司会2名により、議論が深まるケースもあったとは思いますが、2名を確保する手間に見合うものであったか疑問に思う。若手の座長経験をめざすのであれば、発表者あるいは前後のセッションの発表者から、一定年齢以下で学生ではないものの中から最も若い者を機械的に割り当てるなどしてはどうか。シニアの座長を選定し、それぞれの座長がさらに若手座長を探すというのは、大規模組織に所属している者以外に取っては大変に手間のかかることで、こうしたことで多数の人の時間を消費させていいのか大変疑問である。
- 質問は会場から出てくるので、司会者の質問時間もなく、単に司会（時間調整役）になっている気がする。討議の時間もあるが、余り若手司会者の出番もないようである。わざわざ若手の司会者を探してくる手間暇をかける程でもないと感じた。
- 取り組み事態は継続してもよいとは思いますが、セッションによっては中堅・若手の確保に苦労したと聞く（自分が担当したセッションも含む）。司会者2名体制を原則として、状況に応じて1名体制も可としてはどうか。
- 発言が特定の人に偏っているセッションも見られました。多様な意見の場とするように、シニア司会者は「大家」もしくは「その分野のリーダー的」先生にお願いして、全体の議論を誘導・取りまとめる役割に徹してもらってはいかがでしょうか？そのためにはシニア司会者の人選が重要かと思えます。
- 講演者と参加者にとって充実した議論の場とすべきです。このような形で十分に議論に加われない若手を司会者として参加させるのは慎重に考えるべきです。従来どおり査読に関わった者がしっかり責任をとるように司会を務めるのがよいと思えます。

4. 総合討議の設置

実施内容：講演会で活発で深い議論が出来るよう、運営上可能な範囲で、各セッションの最後に総合討議の時間を設けました。

(総回答数 38)

- 【28/38】 継続すべき
- 【 9/38】 課題を解決して継続すべき
- 【 1/38】 総合討議を設ける必要はない
- 【 0/38】 その他



〔自由記載欄〕良かった点、課題、改善案などご自由に記載ください。

○ ポジティブ

- ・ 現在の水工は討議時間が6分と短いので、発表が少し伸びたり、質問者が長い時間使って討議すると、他の人が議論できなくなる傾向がありました。しかし、今回総合討議があったため、そのあたりの不足が解消され、また、活発に意見交換できたセッションもあり、大変良かったです。ただし、セッションによっては、総合討議するほどの共通課題が無い場合も有り、その場合は包括的な議論にはなっていなかった様なので、セッションの組み方に注意が必要かもしれません。
- ・ セッションによっては、テーマが少しずつずれていて討議の盛り上がりは欠けていたところもありましたし、大いに盛り上がったところもありました。時間の調整という意味でも便利でしたし、大変結構な取り組みだと思います。
- ・ 以外に良かった。
- ・ セッションの総合的な話になればそれはそれでよいし、各発表にその時間を割り振るよりも議論すべき発表に対して時間が使えるのはよい。セッション間を移動しにくくなるのはメリットでもあり、学生発表のフォローの面などではデメリットでもある。プログラム編成での工夫は可能か？
- ・ しばらく続けてみる価値はあると思います。私自身は実は、とくに解決すべき課題は思いついていないのですが、多少まどろっこしい空気感があったようにも思いましたので、たぶんどなたかから改善案が出てくると思います。それにご対応の上で、続けてくださればと思います。
- ・ 昨今の課題に対する動向が把握できてよい。進行であらかじめ問題提起を行ってもよい。時間を十分確保する必要。
- ・ 上記、3.と同様です。少なくともこの4.については、継続を強く希望します。
- ・ 大変によい試みであったと思います。総合的に議論を展開することができて、参加している実感がありました。
- ・ セッションの意義や各発表の関係性、その分野で必要なことなど有意義な情報共有ができたと思います。外国人の方にとっては、メリットがないと思います（質問1との関係性）。
- ・ セッション終了後に個別に議論するのもいいですが、セッション参加者全員に情報提供ができて大変

有意義でした。残念ながら、私の担当していたセッションではセッションの総合的な議論が十分に盛り上がりませんでした。これは私の準備不足でした。

- ・ 英語の発表があるセッションでは、討議も英語にすると良いのではと思いました。
- ・ 面白い試みだと思いました。継続でよいと思います。手っ取り早いからか一番最後の発表に質問がやや偏ったような気もしましたが、サンプルが少ないので気のせいかもしれません。
- ・ 総合討議を設ける必要はない。理由は下記のとおり。
 - 個々の発表時間が短いため全体的に延長気味になり、総合討論の時間が十分に取れない。
 - 発表内容が多岐にわたることが多く、総合的に議論できる課題が設定しにくい。
 - 今までどおり、「全体を通じての質疑応答時間」とした方がはるかに良い。
- ・ これまでだとセッション後に雑談で行うような議論ができたので非常に面白かった。是非継続していただきたい。
- ・ この試みは大変良かったと思います。もう少し長い時間をとっても良いくらいかと思います。ただし、3の課題と共通しますが、多様な意見が出やすいような工夫があってもよいかと思います。
- ・ どのセッションでも活発な討議が行われており、ぜひ毎年継続して頂きたいと存じます。
- ・ 関連するものを議論できるメリットもあり、良かったと思います
- ・ 各発表に対する質問・コメントだけではなく、全体を通しての議論が出来たことは、各研究を発展させていくうえでとても有意義だったと思います。各研究のつながりを今まで以上に意識して発表を聴くことができました。
- ・ 各分野の研究をさらに発展させるための総合討議を行うことができた会場もあり有意義なものであると感じました。ただし、総合討議に関してはより見識の広いシニア・中堅の方に司会をしていただくのが良いと感じました。
- ・ 議論し尽くせていないポイント、分野の抱えている課題などを討論するための良い機会になったと思いました。また、座長側の都合としては、それぞれの発表時間を最終的にうまく調整できることがメリットの一つだと思いました。
- ・ 総合討議の場は、基本的に年長者が議論の中心となる傾向にありましたが、それはそれで若い研究者にとっては、勉強の場になるのではないかと思いました。ただ、もう少し欲を出せば、総合討議の話題がその場限りになってしまいもったいないと感じました。例えば、各セッションの総合討議の議題のうち、重要と判断されるものについては、もう少し掘り下げた議論をするような場を設けてその結果を公開するなどの仕組みがあってもよいのではと感じました。このような試みに若手研究者を積極的に参加させるようにすれば人材育成の効果もあるのではないかと思います

▲ ネガティブ

- ・ 総合討議の進行方法などが提示されておらず、セッションによってはあまり意味がないように感じました。発表時間を延長した方が良かったかもしれません。また、討議時間は5分程度設け、休憩時間を長くすることで延長も可とした方がよいかと思います。
- ・ 進行方法や討議方針がセッションによってバラバラでした。総合討議を設置したことの意図や期待が、司会者全員に伝わっていなかったように感じました。各発表内容の関連が浅いセッションでは、発表間のつながりを意識した総合討議は難しいと思います。

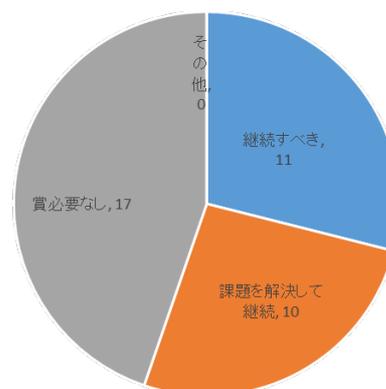
- ・ セッション全ての内容をふまえて議論ができたため、現在直面している課題や解決すべき課題について、共通の認識を持つことができたと思います。あるいは、研究を進める上での留意点や考え方について意見交換ができ、非常に有意義な時間でした。是非とも継続していただきたいと考えています。
- ・ 質問が質問時間中に終わらないセッションでは総合討論の時間がかなり有効であった一方で、質問時間中にあまり質問がなかったセッションでは、かえって苦痛の時間でもあったような気がしました。また、質問がしきれなかったセッションにおいて、(まるでシンポジウムの総合討論のように)座長が発表の講評とコメント(セッションのとりまとめ)をして、討論の方向性を絞ってしまうことにより、逆に本来したい質問ができなかったセッションもありました。
- ・ シニア研究者がしゃべりすぎているきらいがあった(若手が消極的だし、そもそもいないし)。もっと若手を含む発表者全体の討論に持っていくように運営すべきと思います。
- ・ 15分程度の時間では十分な議論ができなかった。個々の発表の質疑に時間が取られ、総合討議の時間が短くなり、数名が発言しただけで終わってしまった。また、一つのセッションでも発表内容は多岐に渡るため、参加者全員で共有できるテーマでの議論は難しい。結果として、一つの内容について数名が発言するだけで終わってしまった。ただ、セッションによっては発表内容が近い場合もあるはずなので、総合討議の実施については、セッション司会者に任せたほうがよいと思う。
- ・ 活発かつ深い議論ができる大変よい機会かと思います。しかし、多くの場合が全体的な討論というよりも個別質問のみに終わることが多く、今後の分野としての課題・方向性などを話合う場にはなれていない気がしました。もし、総合討論で話し合っていくべき課題があればそれを明確にし、議論のための準備を司会者はしっかりすべきかと思いました。そのような「分野の課題・方向性など」を話合う場ではないのであれば、総合討論の時間を中止し、各発表の質疑の時間を長くすればよいのかなと思います。

5. アウトスタンディング・ディスカッション賞の試行

実施内容：活発な議論を奨励することを目的に、アウトスタンディング・ディスカッション賞の選考を試行しております

(総回答数 38)

- 【11/38】 継続すべき
- 【10/38】 課題を解決して継続すべき
- 【17/38】 特に討議に関する賞を設ける必要はない
- 【 0/38】 その他



〔自由記載欄〕良かった点，課題，改善案などご自由に記載ください。

○ ポジティブ

- ・ まだすべきかどうかは分かりませんが、マイナスになることはないと思います。
- ・ ないほうがよい、という理由は何も思いつきませんし、表彰に値する事項ですので、継続してみるべきと思いました。
- ・ ベテランの先生が選ばれても仕方ないので、選考対象に年齢制限などを設けてはどうか。
- ・ なんであっても賞と名の付くものは刺激・励みになると感じますので、基本的には賛成です。ただ、選考の目安となる情報がもう少し知りたいと感じました。各セッションから1人推薦されてきて、最終的にはそのうちの何割程度に賞が与えられるのかなど。「強く推薦する」と「推薦する」をどう使い分けるのか、迷います。また、表彰対象はあくまでも質問者のみ、なのでしょうか？ディスカッションはあくまでも質問者と回答者で構成されるものなので、いくら立派な質問でも、回答者がそれを理解できなければよいディスカッションは生まれません。そういう意味ではアウトスタンディングな発表がアウトスタンディングなディスカッションを手助けするとも思われ、誰を候補者と考えるべきなのかが難しくなります。
- ・ このおかげで、質疑が例年よりは活発だと思いました。
- ・ 受賞は研究活動上励みになるので、そのような機会が増えることは良いと思います。
- ・ よいアイデアと思いましたが、負の部分もあると感じました。健全な議論を妨げ、賞を意識して過剰に発言する人がいたのを見ている。本来の論文の内容は正当に評価されるべきであり、これに支障がでないようにしていきたい。
- ・ 今年度の結果を踏まえた上で、賞の選考基準を明確にさせていただくと推薦しやすいと感じました。

▲ ネガティブ

- ・ 賞の設置目的に若手の議論の活性化があったと思いますが、シニア・中堅が議論をリードするセッションが多くなりがちであった。少なくとも討議のある程度の部分を若手中心に当てるようにするとか、

もしくは、難しいかもしれませんがセッション毎に若手の参加を依頼して質問を準備頂くようなことが必要かもしれません。

- この賞の設置により、普段発言をしない人が新たに発言をしたようには見えなかった（質問するのはいつものメンバー）
- 個人的には若手に議論に参加して欲しかったですが、どうしても、経験の深いシニア・中堅が議論の中心になってしまうきらいがありました。特に、有力なシニアが勢いよく意見を述べると、その流れで議論が決まってしまう傾向があり、難しいなと思いました。シニアが問題なのではなくて、それを遮ってでも前に出ようとする若手がいれば良いだけの話ですが、なかなかそういう突破力のある若手が少なかったですね。議論が下手なのは世の中全体の問題かもしれません。
- 議論活性化のインセンティブになっているとは思えない。この賞がなくても喋る人は喋る。
- 受賞を目的に質疑する人はいないと思います。会場からの質疑が少ない場合に場を盛り上げるのは、司会や委員の役目の一つと思います。
- とくにこのような賞を設けなくても、しゃべりたい人はしゃべりますし、たいていの場合、そのような人はすでにある程度エスタブリッシュされた人なので、そのような人に改めて賞をあげなくてもいいかなと思いました
- 質疑参加者は名前や所属を明瞭に記録できないことも少なくないため、結果的に座長の知っている人を推薦せざるを得ないことにもなりかねない。論文等で名前が明瞭にわかる発表者を対象とした表彰に比べ、公平性に欠くところが大きいように思われる。
- 賞があるから議論をするという考え方は本来は違うと考えています。しかし、シニアと比べ若手の発言が少ないという現状を打破するよいきっかけにはなると 생각합니다。そこで、この賞自体は継続して実施し、世代を問わず活発な議論ができるようになった場合に、賞を発展的に廃止していくような計画がよいのではないかと考えています。
- 質問が活発になるような動機付けになっていたのかどうか、検討する必要がありそうに感じました。
- 評価項目を明確にすべきと思います。
- 議論を活性化させるための新たな問題提起等を行うことは奨励されるべきだが、多様な意見をシェアすることも重要であり、一人で多くの時間を消費することが望ましくない点もあり、賞の基準が難しい。優れた視点の意見は、自然と皆が評価するので、賞は必要ないのでは。
- 以下のような、相当入念な準備があった上でのディスカッションはアウトスタンディングと言えそうですが、拝聴した中ではその意味でのアウトスタンディングな議論はなかったようでした。
 - ・ 事前に論文を読み込み、かなり詳細にその論文に対して検討されてきたような場合
 - ・ 総合討論の場において、複数の論文を組み合わせた新たな地検が提案されたような場合上記だけではないと思いますが、該当なしを含めて条件を付けた上でのアウトスタンディング・ディスカッション賞を検討されたいかがでしょうか。
- 短い討議時間において、賞を与えるというのは身内に賞を与えるような形になり、時間が経つにつれて形骸化する可能性がある。何人選ばれるのか、選考基準が不明確である。
- シニアの先生が結構活発に討議され、各若手からの質問はセッションで各自一、二問程度であった。活発に討議を盛り上げたのはシニアの先生であり、若手を優先すべきではあったが、特にアウトスタンディングな若手はおらず、シニアの先生を選定せざるを得なかった。シニアの先生はそのような賞

は要らないでしょう。

- 論文賞や奨励賞があるし、あまり賞は多くなくてもよいと思う。このような受賞歴が役に立つのは、大学院生であるが、そうであれば優秀発表賞のほうが良いと思う。この賞がほしい参加者がいるのかよくわからない。
- 賞があるから頑張ろうというインセンティブにはならないような気がします。司会者 2 名で特に場が盛り上がるような工夫をすればそれで良いのではないのでしょうか？
- 発表に関しては同一のルールの中で優れたものを選ぶという客観性が担保できますが、質問に関してはよいかどうかのルールを決めることも難しく、（仮に素晴らしい意見であっても大家の先生に賞を出してもよいかなど）いろいろ迷うよりは賞を設けなくてもよいように思います。そもそも意識の高い人が集まっているので、賞があってもなくても積極的に良い意見を出す方はいると思います。むしろシニア司会者の誘導が、討議を活性化するための重要な要素ではないかと思います。
- 選考基準が司会者によって異なると考えられること、賞の性質からある程度の若手が良いと思われるが、質問者の年齢まではなかなかわからないこと

6. その他、講演会全体を通じて良かった点、課題などあれば、以下にご記載ください。

〔自由記載欄〕

● セッションについて

- ・ セッション制は専門的議論を深める上では、非常に有効であることは承知しておりますが、細分化しすぎて他の分野のことが分からなくなってしまうデメリットもあります。いろんな分野の人がまとまって議論できるセッションがいくつかあっても良いのかもしれません。一例としては温暖化に関する議論は、全ての水工学分野にまたがって議論できるものであるため、そういう企画セッションがあっても良いかもしれません。
- ・ 院生が主体で運営できるようなオーガナイズドセッションを募集するとか、院生が主体で開催する勉強会を開催するなど、何か院生が主体的に参加できる企画があればと思います。

● 開催時期、期間について

- ・ とにかく、若手や民間の方が少ないのが問題だと思います。大学教員だけでなく様々な人を巻き込んでゆく取り組みをしないと、今後、この分野が衰退してゆくのではないかと危惧します。実際、論文投稿数も低下傾向にあるようです。今回、執行部が1～5の施策を打って下さったのは大変感謝しております。さらなるお願いとしては、開催時期を3月ではなくて、8月～12月にシフトしていただけると、学生や民間の方の参加が増えるのではないかと思います。時期の変更はテクニカルな意味で大変な困難を伴うと思いますが、何卒ご検討下されば幸いです。
- ・ 3日間の開催を2日間に減らすべき時代になったような気がします。また、土木が総合工学であることを考えますと、部屋数も少し減らせればと思います。もちろんそのためには何らかの工夫が必要でしょう。たとえば地球環境シンポジウムのようにA論文とB論文のようなものに分けて、たとえばB論文は短い紹介(2-3分)の口頭発表(その場での質疑はなし)+ポスター発表にするとか、そのような手があるかもしれません。B論文(名称は何でも結構です)のようなものを設けることによって、査読の手間も減らせることでしょう。また、実態として学生の発表が多いわけですが、博士課程学生のようにしっかり質疑のできる方と、正直、質疑がまだまだである方とが混ざっておりますし、もちろんプロの大人の研究者の方の発表もありますので、AクラスとBクラスと分けたほうが、レベルに応じた発表・質疑と、より密な議論が展開できるのではないかと思います。ポスターの導入によって、日数や部屋数の圧縮も見込めるものです。

● 論文審査について

- ・ いずれも議論を活性化しようとする試みと理解しました。であれば、論文審査においてもそのようなことが考慮されるべきのような気がします。例えば、完成度は高くないが、議論の種になるような論文や、査読者から議論に近い意見が多い論文については、復活採択できるような仕組みがあってもよいと思います。

● CD-ROM について

- ・ もういい加減、あの冊子偽装した CD-ROM は止めませんか?無駄なコストが発生している気がし

てしかたありません。もはや CD-ROM ドライブが付いてないノート PC が多いですし、USB メモリではダメなのではないでしょうか？（コストが違う？）もう少し早めに CD-ROM を送ってもらえるとうれしいです。今回はそうでもなかったと思いますが、かなりギリギリに届いたときもあったように思います。

● その他，感想

- ・ 新しい試みを導入したことによって、全体的に活気があって、よかったと思います。ありがとうございました。
- ・ 以前よりとても活発な議論ができ、有意義な学会の時間を過ごすことができたことに、運営された皆様に感謝します。ただ、英語のスライドに関しては改善の余地があると思います。
- ・ 水工学委員会ならびに実行委員会の方々の様々な趣向とご尽力により、全体的には忌憚のない活発な議論が行われ、非常に濃厚で有意義な講演会であったと感じています。投稿された論文に基づいて自由な議論ができる場として、今後も水工学講演会が果たす役割は極めて大きいと考えています。引き続き、盛んな議論の場を提供していただきますようお願いするとともに、このアンケートに回答することで微力ではありますが水工学講演会の発展に寄与することができれば心より有り難く思います。
- ・ ご担当の先生お疲れ様でした。
- ・ お忙しい中、新たな試みを提案および実施して下さいました，実行委員会の方々に敬意を表します。全体として水工学分野の発展や教育効果において有意義だと感じています。ありがとうございました。
- ・ 活性化されて非常に有意義な水工学講演会で会ったと思いました。執行部のご努力に敬意を表します。
- ・ 新しい試みを様々に導入されるなど講演会の実施に工夫を凝らされている様子を通して運営されている方のご努力が伝わってきました。研究について他研究者と議論できる貴重な場になり今後も積極的に参加しようと思いました。
- ・ このような新しい試行をして頂き，大変素晴らしい取り組みだと思います。すぐには成果が出ないものもあると思いますが，一定の緊張感が生まれて新鮮でした。
- ・ 実行委員の方々は寒い中どうもお疲れ様でした。ありがとうございました。
- ・ 他の学会と比較し、様々に新しい取り組みを行おうとしていることはとてもよいことと思います。ただ、若手が活発でない分野になかなか未来がなく、他分野への流出がとまらなくなるのではという一般論がありますので、ぜひ若手養成・活躍できる場をご提供いただけますと学会、若手の両者にとってとてもよいのではないかと感じます。
- ・ 今回の改革を立案・実施された委員会執行部の皆様のご尽力に感謝いたします。前回までよりは確実に活性化されたと感じます。
- ・ 若手研究者へのエンカレッジと議論の活発化は重要な課題です。ただし、混乱が起こらないように留意して急激な変化は避けるのがよいと思います。例年どおり有意義な講演会でしたので、さらに望ましい姿にするために一緒に考えていくつもりです。
- ・